

Ｂ区第83号住居跡(第201図)

調査区東端部のC-13区に位置する。北西側に重複する第84号住居跡との新旧関係は、床面の遺存状態から本住居跡の方が新しいことが判明した。形態は方形で、規模は長軸3.16m、短軸3.08m、深さは5cmと非常に浅い。主軸方位はN-16°-Wを示す。

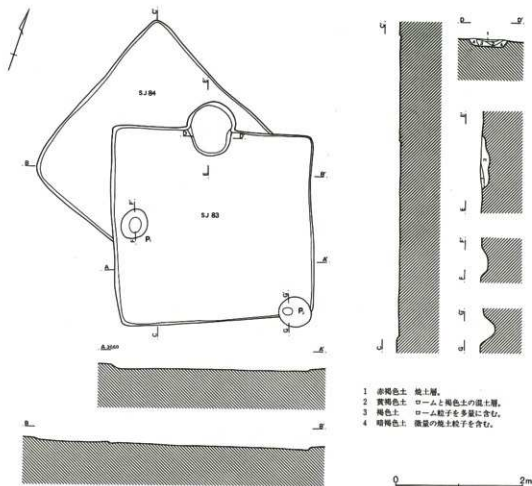
床面は概ね平坦だが、表面に地山の礫層が浮き出ており細かい凹凸が顕著である。覆土はほとんど残されておらず堆積状態は不明である。

カマドは北壁に設けられていた。焚口から先端までの長さは82cm、幅は80cmで、底面は床面から10cm掘り込まれていた。袖は断面観察によっても検出されなかった。カマド覆土は4層に分かれる。天井部は既に削平されたものと考えられ、おそらく第1層が火床面に相当しよう。第2～4層は掘り方埋土と推定される。

ピットは2本検出された。P₂は住居には伴わない。P₁の帰属は不明である。

貯蔵穴と壁溝は検出されなかった。

出土遺物は全く検出されず、時期は不明とせざるを得ない。



第201図 B区第83・84号住居跡

B区第84号住居跡(第201図)

C-13区に位置し、第83号住居跡に切られていた。形態は方形または長方形を呈するものと推定されるが詳細は不明である。規模は南北長3.10m、東西残長3.00m、深さは3cm程度と極めて浅く、辛うじて住居形態を把握することができた程度であった。主軸方位はN-16°-Eを示す。

床面はおそらく削平され、検出面は既に掘方と考えられる。覆土の状態は不明である。

カマドや貯蔵穴等の付属施設は検出されなかった。

出土遺物は全く無く、時期は不明である。

B区第85号住居跡(第202図)

調査区東端のC・D-13・14区に位置する。第9号溝跡の攪乱を受けるが、概要は判明した。形態は方形で、規模は長軸4.20m、短軸3.98m、深さ10~20cmを測る。主軸方位はN-35°-Wを示す。

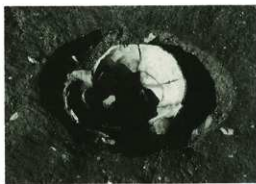
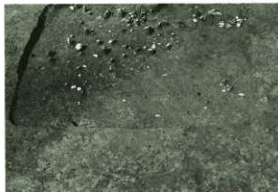
床面は北西側がやや高く南東側が低い傾向にある。覆土は7層に分かれる。全体に小礫の混入が目立ち、概ね自然堆積と思われる。

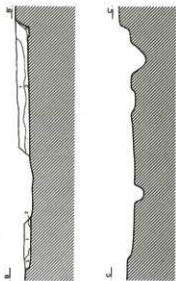
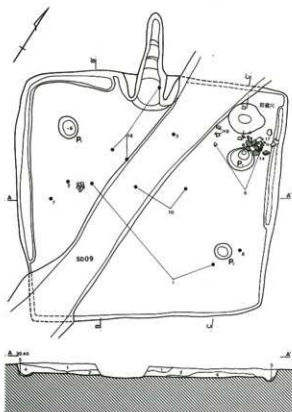
カマドは北壁に位置する。規模は全長1.55m、焚口幅40cmの長大なカマドで、燃焼部底面は床面から5cm程掘り込まれていた。燃焼部自体はほぼ壁内におさまるものと推定され、煙道部はやや幅を狭め壁外に約90cm延びている。覆土は9層に分かれ、第I層は住居埋土、第II~V・VII・VIII層は天井部及び袖の崩落土に相当しよう。袖は灰白色粘土を主体に構築されていた(第IX層)が、上部はかなり崩壊していた。

貯蔵穴はカマド東側のコーナー部に設けられていた。形態は楕円形を呈し、規模は長径60cm、短径46cm、深さ25cmで、底面は播鉢状に凹む。貯蔵穴内部には須恵器甕の底部破片(第203図15)が正位で出土した。住居内から他の破片は出土していないことから、意識的に埋設した可能性がある。

ビットは3本検出された。何れも住居に伴うものであるが柱穴とするには全体にやや浅い。壁溝は南壁~東壁の南半では検出されなかった。

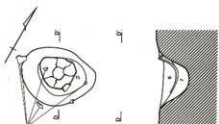
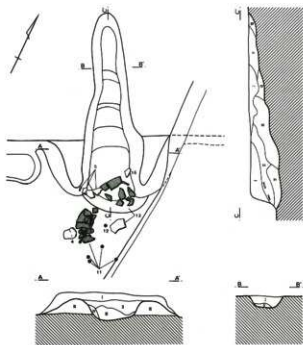
出土遺物は土師器と須恵器がある(第203・204図)。出土数を示すと、土師器は坏類が10点、甕2点、小形甕(鉢?)1点、台付甕2点(脚部)、甌2点、壺2点、須恵器は坏が1点、高台坏1点、甕底部1点、瓶類肩部(東海産)1点となる。土師器坏は模倣坏系の比企型坏(第203図4・5)が3点、統比企型坏(1・6)が3点、北武蔵型坏(3)が1点、同系と思われる皿(8)が1点、模倣坏(2)が1点





- 1 黒褐色土 焼土粒・炭化粒少量含む。小礫含む。
 - 2 黒褐色土 ロームブロック・小礫少量含む。
 - 3 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック・小礫含む。
 - 4 暗褐色土 ロームブロック少量含む。礫混入なし。
 - 5 暗褐色土 ローム粒子・小礫を含む。
- 貯蔵穴
- 6 黒褐色土 焼土粒・炭化物・ローム粒を少量含む。
 - 7 黄褐色土 ローム粒子と焼土粒子を少量含む。
 - 8 灰褐色土 ローム粒子を少量含む。

0 2m

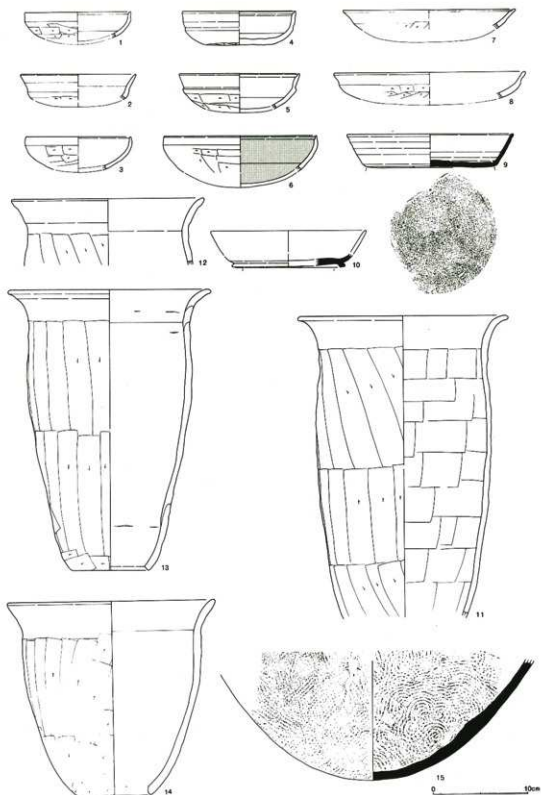


カマド

- I 黒褐色土 ローム粒・焼土粒と小礫を少量含む。
- II 灰褐色土 粘土ブロックと焼土粒を多く含む。
- III 褐色土 焼土ブロック・同粒子と粘土を多量に含む。
- IV 褐色土 灰白色粘土主体層。焼土粒子を含む。
- V 赤褐色土 焼土主体に褐色粘土を含む。
- VI 褐色土 多量のローム粒子と少量の焼土を含む。
- VII 灰白色土 粘土主体にローム粒子と炭化物を含む。
- VIII 褐色土 灰白色粘土と焼土ブロックを含む。
- IX 灰白色土 粘土を主体にロームと焼土粒子を含む。

0 1m

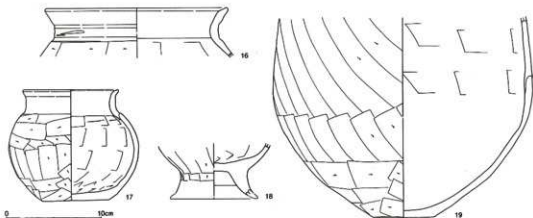
第202図 B区第85号住居跡・カマド



第203图 B区第85号住居跡出土遺物(1)

という構成比である。4は体部上半に削りが及ばず、内面は黒色処理されていた。8は風化が激しく不明瞭だが、内面に放射状暗文が施されていた可能性がある。11はカマド前面の床面に横倒しの状態、13はカマド内から潰れた状態でそれぞれ出土した。14の瓶は貯藏穴脇の床面出土。

須恵器環(9)は北西コーナー付近の覆土から出土した。口径は17cmを超える大型品で、扁平浅身の盤状の形態である。底部は平底風で全面回転ヘラケズリされるが、腰部までは削り込んでいない。高台環(10)の高台は底部外縁部からやや内側に付されている。底部は回転ヘラケズリ。15は甕の底部で丸底を呈する。外面は斜格子叩き、内面は同心円状の当具痕(青海波文)が残る。9の須恵器環が他の土器群と供伴するかどうかはわからないが、土師器環、甕と瓶の様相からみて稲荷前V期に主体があるものと考えられる。



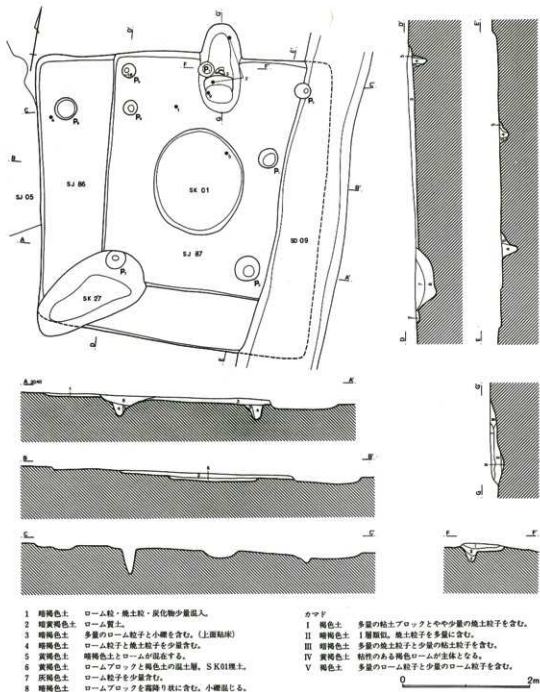
第204図 B区第85号住居跡出土遺物(2)

B区第85号住居跡出土遺物観察表(第203・204図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	環	(11.1)	2.8		AB	A	いよ唯	25%	No60,64 床面 無彩
2	環	(12.1)	2.7		ABE	B	いよ唯	5%	No20 床面 模倣環
3	環	(11.0)	3.5		ABE	B	橙	10%	No183 床面 北武藏系
4	環	(11.8)	4.1		ABC	B	浅黄橙	40%	No163 カマド内 体部上半は無調整
5	環	12.5	3.7		ABC	B	いよ黄	60%	No143~145 カマド内 無彩
6	椀	(16.0)	3.8		ABC	B	いよ黄	10%	No109,126 床面 内面黒色処理
7	皿	(18.0)	2.1		BC	A	いよ唯	5%	No21 覆土(+10cm)
8	皿	(20.0)	2.8		ABE I	B	橙	10%	No58 床面 北武藏系か 内面風化
9	環	(17.4)	3.5	(14.2)	ABC	A	灰	50%	覆土
10	高台環		1.4	(10.8)	ABC	B	灰白	35%	No39,43 覆土(+6~7cm)
11	甕	21.4	31.6		ABC J	B	いよ唯	50%	No146,149他 覆土(0~+6cm)
12	甕	(20.0)	6.9		ABC	B	いよ黄	20%	No179 カマド内
13	瓶	20.8	29.4		ABC	B	いよ唯	70%	No148,176 カマド内
14	瓶	21.6	20.3		ABCE	B	いよ黄	70%	No77~89他 床面
15	甕		12.5		ABC	B	灰白	80%	No192 貯穴内(-15cm) 青海波文
16	壺	(19.0)	5.2		ABC	A	いよ黄	20%	No15,35,138 床面
17	小形壺	9.8	11.6	7.0	ABC	A	橙	90%	No70~72他 床面 無彩
18	台付甕		5.5		ABC	A	浅黄橙	80%	No105,107 床面
19	壺		21.0	(6.5)	ABC	A	いよ唯	50%	No93他 覆土(0~+5cm) No193貯穴内

B区第86号住居跡(第205図)

調査区東端のD-13区に位置し、第5号住居跡を切って構築されていた。重複する第87号住居跡とは北壁を共有し主軸も同一であることから、直接建替えられたものと考えられる。新旧関係は本住居跡が新しいものと考えられる。東壁部は第9号溝跡によって破壊されていたが、形態は方形とな



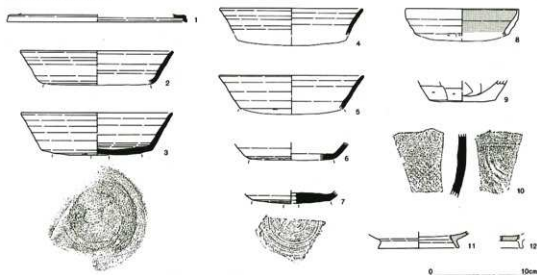
第205図 B区第86・87号住居跡

るものと推定される。残存規模は長軸4.54m、短軸(北壁長)4.30m、深さは3～8cmと非常に浅い。主軸方位はN-9°-Wを示す。

床面は地形の傾斜に合わせて西側が高く東側が若干低くなっていた。第87号住居跡上部には貼床が確認された(第3層)。覆土は西壁部で確認されたのみ(第1層)で、ほとんど遺存していない。

カマドは北壁に位置し、壁を40cm切り込んで構築されていた。規模は全長140cm、幅70cmで、底面は皿状に掘り込まれていた。遺存状態が悪く袖等の上部構造は不明である。覆土は5層に分かれ、第Ⅰ～Ⅲ層は天井部崩落土の一部と推定される。ピットは両住居合わせて8本検出された。

出土遺物は土師器、須恵器、灰釉陶器と緑釉陶器がある。土師器は坏が2点、甕が3点、小形甕、台付甕1点、須恵器は坏が12点、蓋が2点、甕胴部片が16点、壺1点出土した。灰釉陶器と緑釉陶器は混入である。第206図8は有段口縁坏である。2は口径が15.8cmと大振りの須恵器坏で底部は弱い丸底状を呈する。6の底部は手持ちヘラケズリされている。須恵器坏類の様相から稲荷前VI期に位置付けられよう。



第206図 B区第86・87号住居跡出土遺物

B区第86・87号住居跡出土遺物観察表(第206図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	蓋	(18.8)	0.8		ABC	A	灰	10%	No6 覆土(+9cm)
2	坏	(16.0)	3.4	(11.2)	ABC	B	灰白	10%	No39, 43 カマド内
3	坏	(15.8)	4.4	(11.8)	ABC	B	緑灰	45%	No41 カマド内
4	坏	(15.0)	2.8		ABC	A	灰白	15%	No4 床面
5	坏	(15.2)	3.5		ABC	A	灰	10%	No2 SK01内(-4cm)
6	坏		1.8	(8.8)	ABC	B	灰	15%	覆土 底部手持ちヘラケズリ
7	坏		1.3	(8.2)	ABC	A	灰白	40%	覆土
8	坏	(11.7)	2.9		AB	A	におい遣	10%	覆土 内面黒色処理
9	甕		2.2	(7.0)	ABC	A	におい遣	25%	No37 カマド内
10	甕				ABC	A	暗灰		覆土
11	緑釉皿		1.7	(8.6)	J	A	灰白	10%	覆土
12	緑釉皿				J	B	灰白		覆土

B区第87号住居跡(第205図)

D-13区に位置する。第86号住居跡と北壁を共有し、本住居跡から86号住居跡に拡張したものと考えられる。また、東壁部は第9号溝跡に、北西コーナー部は第27号土壌によって破壊されていた。形態は方形を呈するものと推定され、残存規模は長軸3.72m、短軸3.04m、深さは北壁部で8cm程と浅い。主軸方位はN-9°-Wを示す。

床面はやや凹凸が顕著で、地形傾斜に合わせて、全体的に東に向かって下がる傾向が認められた。覆土はロームと小礫混じりの暗褐色土単層(第3層)で、おそらく住居拡張に伴って埋め戻されたものと推定される。また床面下部から円形の土壌が1基検出された。堆積土は明らかに人為的に埋め



戻された状況が観察され、いわゆる床下土壌と考えられる。

本住居に属するカマドは検出されなかった。第86号住居跡と同一地点に存在した可能性もあるが確認は得られなかった。

遺物については確実に本住居跡に伴うものが認められなかったため、時期決定は困難であるが、重複する第86号住居跡に先行することから稲荷前V期～VI期と考えておきたい。

B区第88号住居跡(第207図)

F-10・11区に位置する。形態は長方形を呈し、規模は長軸5.62m、短軸4.54m、深さ15～20cmを測る。主軸方位はほぼ座標北を指す。

床面は概ね平坦である。覆土は上下2層に分かれる(第1・2層)。両層ともに粘性の強い土質で、下層にはロームの混入が多く認められた。

カマドは北壁のほぼ中央部に位置し、壁を80cm掘り込んで構築されていた。最大幅は90cmと比較的広く、底面はほぼ平坦で床面下の掘り込みは認められなかった。袖部は断面観察によっても痕跡を確認できなかった。カマド覆土は5層に分かれ、第II層が天井部崩落土の一部に相当しよう。

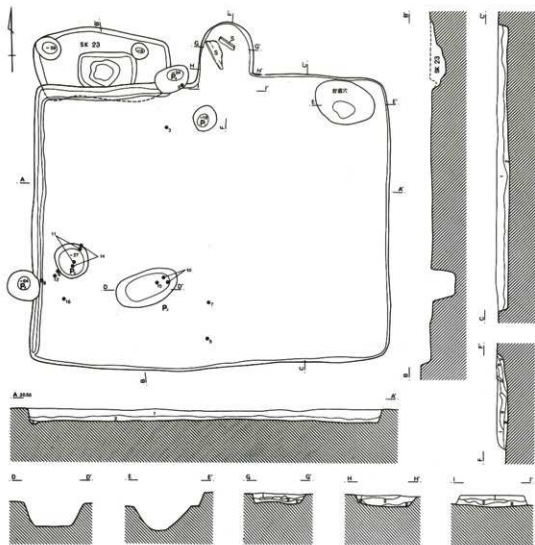
貯蔵穴は北東コーナー部に位置する。形態は楕円形で、規模は長径96cm、短径72cm、深さは40cmと深く楕円状に掘り込まれている。ビットは住居内から3本、壁にかかって2本検出された。



壁溝は西壁と北壁の西半にかけて巡っていた。深さは5cm程と浅い。

出土遺物は土師器と須恵器がある。出土数を記すと、土師器は坏類が口縁部破片数で27点、甕10点、小形甕2点、須恵器は坏が3点、蓋2点、甕1点、脚付碗1点となる。

土師器坏類は比企型坏(第208図1～4・8・9)と北武蔵型坏(5・7)、暗文を施す坏(6)等がある。8は混入であろう。10は在地産の皿で



- 1 黒褐色土 ローム粒・焼土粒を少量含む粘性が強い。
 2 暗褐色土 径1-5cm大のロームブロックとローム粒多量混入。
 粘性が強い。
 3 暗褐色土 ローム粒子少量混入。
 カマフ
 4 黒褐色土 ロームブロック・焼土粒と炭化物を少量含む。

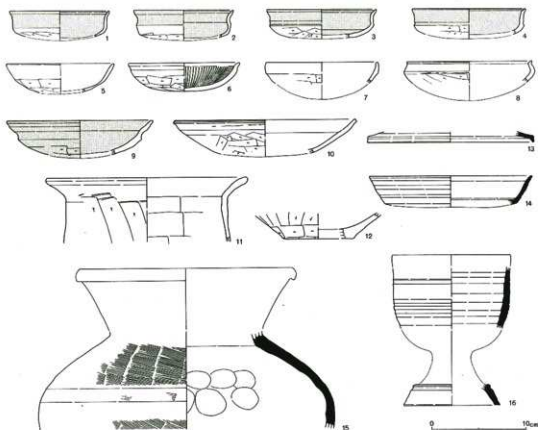
- II 暗褐色土 焼土ブロックと粘土ブロックを多量に含む。
 III 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒と焼土粒を少量含む。
 IV 褐色土 焼土粒子と炭化物を少量含む。
 V 暗褐色土 ローム粒子を少量含む。

0 2m

第207図 B区第88号住居跡

底部は平底になるものと推定される。

須恵器環(14)は推定口径17cm程と大振りであり、土師器環類に伴うかどうかはわからない。16は類例は少ないがおそらく脚付椀と思われる。体部と脚部は接合せず、推定図化した。体部の破片は第59-61号住居跡からも1点出土しており本例と接合した。土師器環と須恵器の様相に若干齟齬があり時期比定は難しい。主体となる土師器環の特徴から稲荷前V期を中心とする段階と推定される。16の脚付椀は直接伴うものではなからう。



第208図 B区第88号住居跡出土遺物

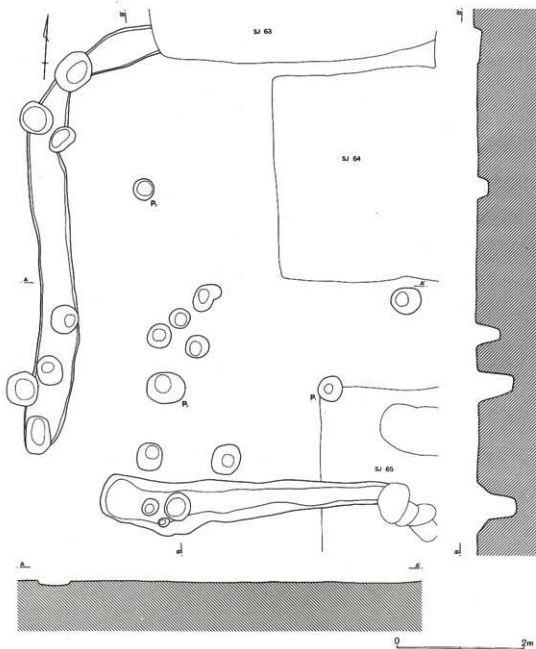
B区第88号住居跡出土遺物観察表(第208図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	構成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	(10.3)	2.7		ABC	A	にぶい澄	15%	覆土 赤彩
2	坏	(10.3)	2.9		ABC	A	にぶい澄	25%	覆土 赤彩
3	坏	(11.5)	3.0		ABC	A	にぶい澄	20%	No26 覆土(+5cm) 赤彩 口唇部磨滅
4	坏	(11.8)	2.7		ABC	A	にぶい濁	10%	カマド内 赤彩
5	坏	(11.2)	3.0		ABE	B	浅黄橙	25%	No85 覆土(+15cm) 北武蔵系
6	坏	(11.6)	3.0		ABE	B	橙	30%	No13 床面 内面放射状暗文施す
7	坏	(11.6)	2.2		ABE	B	橙	10%	No70 覆土(+6cm) 北武蔵系
8	坏	(13.0)	2.3		ABCE	A	にぶい澄	10%	No38 覆土(+16cm) 混入か
9	皿	(15.2)	3.6		ABC	A	にぶい濁	10%	No25 覆土(+11cm) 黒色処理
10	皿	(19.0)	3.5		AC	A	浅黄橙	20%	No16,61 覆土(+3~17cm)
11	甕	(20.8)	6.7		ABC	A	にぶい澄	10%	No7,10 覆土(+3~17cm)
12	蓋		2.6	(7.6)	ABC	B	黄褐	25%	No39 床面
13	蓋	(17.4)	1.1		ABC	A	オリーブ灰	5%	覆土 天井部自然釉付着
14	坏	(17.0)	3.1	(13.8)	ABC	A	灰白	15%	No8,11 覆土(0~+7cm)
15	甕		10.2		ABC	A	灰白	20%	No60 覆土(+16cm) 混入か
16	脚付椀		(10.0)		ABC	A	灰	10%	No103 床面

第89号住居跡(第209図)

D・E-10・11区に位置する。第63～65号住居跡と切り合うが新旧関係は明確に捉えられなかった。遺存状態はきわめて悪く、壁溝または掘り方部分が溝状に検出されたにとどまる。形態は方形を呈するものと推定される。規模は南北長7.90m、東西の残存長5.60mを測る。主軸方位はN-5°-Wを示す。

床面は削平されており、詳細は不明である。ピットは10数本散在していた。4本主柱穴とすると



第209図 B区第89号住居跡

P₁～P₃がそれに相当する可能性がある。

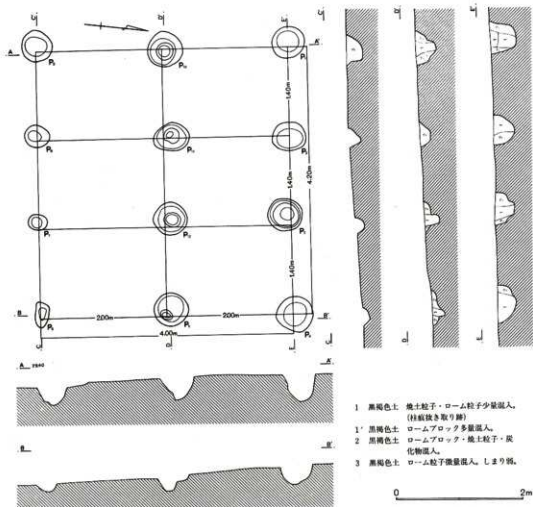
壁溝または掘り方の溝幅は30～85cm、深さは10cm以下と浅く、南西コーナー一部が途切れている。覆土の状況は不明である。

遺物は検出されなかったため、時期は不明である。

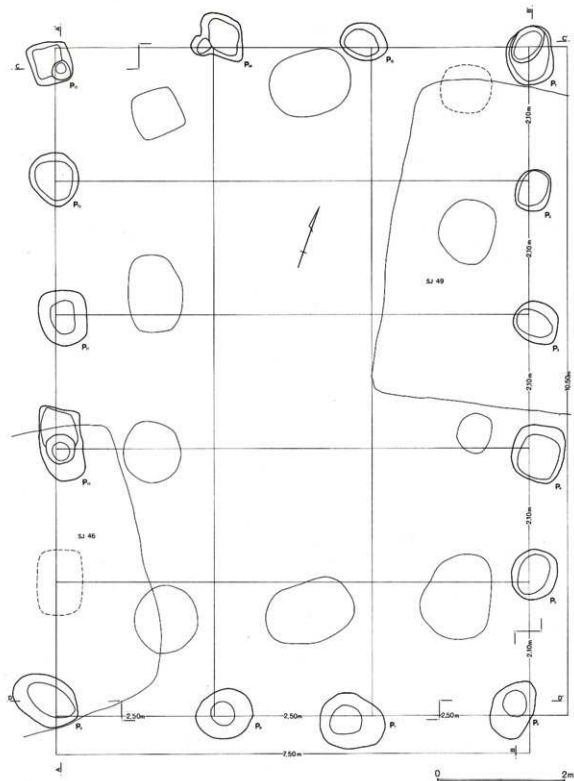
(2) 掘立柱建物跡

B区第1号掘立柱建物跡(第210図)

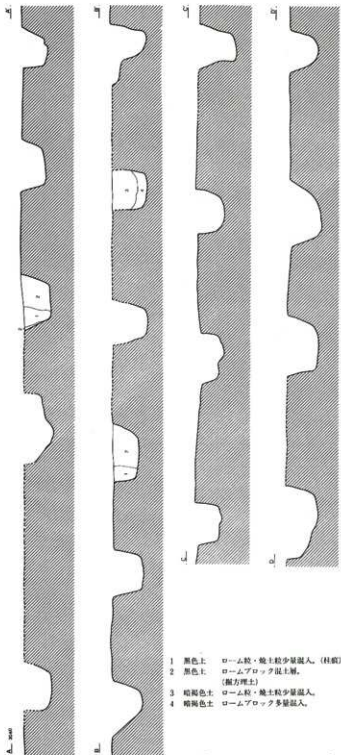
調査区中央部南端のF-9・10区に位置する。南に下る緩斜面上に立地するため、南側の側柱の上部は削平され規模が小さいが、本来はほぼ同一規模であったものと考えられる。3間×2間の総柱建物で、規模は桁行4.20m、梁行4.00m、柱間寸法は桁行1.40m、梁行2.00m等間である。主軸方位はN-83°-Eを示す。



第210図 B区第1号掘立柱建物跡



第211图 B区第2号孤立柱建物跡



- | | |
|--------|-----------------------|
| 1 黒色土 | ローム粒・焼土少量混入。(柱底) |
| 2 黒色土 | ロームブロック混土層。
(掘方埋土) |
| 3 暗褐色土 | ローム粒・焼土少量混入。 |
| 4 暗褐色土 | ロームブロック多量混入。 |

0 2m

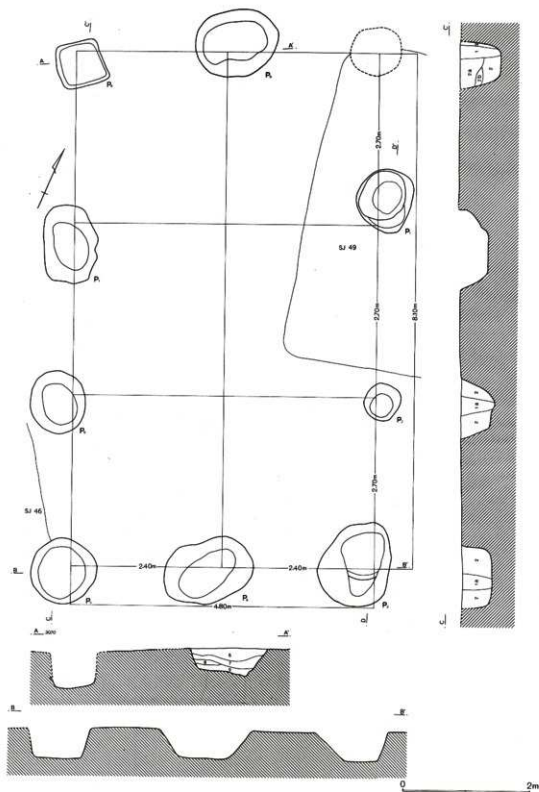
柱穴は南側柱列を除くと、概ね円形を呈し、直径は50cm前後である。掘り込みは全体にしっかりしており、確認面からの深さは斜面部にあるP₈~P₉とP₁₀が浅いが、標高に直すとほぼ同一深度まで掘り込まれていた。柱痕または柱を抜き取ったと思われる痕跡が7本の柱穴で確認できた。柱底は焼土とローム混じりの黒褐色土で締めりは弱い(第1・1層)。掘方埋土はロームブロックと黒色土の混土で形成され固く締まっていた(第2層)。

柱穴はさほど大きくはないがしっかりと掘り込まれ、桁行の柱間寸法が1.4mと短いこと、更に総柱構造を採ることからかなりの荷重に耐え得る堅牢な建物、例えば高床の倉庫的な機能を想定するのが妥当と考えられる。

出土遺物はP₈覆土から比企型坏の破片が出土したのみである。遺構に伴うか否かは不明である。しかし、建物構造から見て古代に属するのは間違いなからう。

B区第2号掘立柱建物跡(第211図)

調査区中央部のD・E-9・10区に位置する。第46・49号住居跡と重複し、掘立柱建物跡の方が新しいものと考えられる。また、掘立柱建物跡内部には第3号掘立柱建物跡が入れ子状に重



第212图 B区第3号掘立柱建物跡(1)

複していた。概ね主軸も揃い、第3号掘立柱建物跡を身舎、本掘立柱建物跡を廂と考えることもできるが、柱筋が揃わず建物構造が今一つ明確でなかったことから一応別の建物として扱った。

5間×3間の大型建物で、規模は桁行10.50m、梁行7.50mを測る。柱間寸法は一応桁行2.10m、梁行2.50m等間に復元できるが、若干ずれ気味となる柱穴もある。P₉-P₁₀間の柱穴は本来は存在したと思われる。主軸方位はN-20°-Wを示す。

柱穴形態は円形系統のものと同様に方形を意識したものが存在するが、基本形態は後者であろう。大きさは径70cm～110cm、深さは40～50cm程で掘り込みはしっかりしている。柱痕の有無については不明な点が多い。P₄とP₁₁では柱痕が明瞭に観察された。柱痕埋土はローム粒子と焼土粒子を少量含む軟質な土であった。掘方埋土は基本的にロームブロックをランダムに混入する黒色土、及至暗褐色土で構成され、堅く締まっていた(第2・4層)。

出土物は検出されなかった。時期については重複住居の年代から8世紀初頭以降である。

B区第3号掘立柱建物跡(第212・213図)

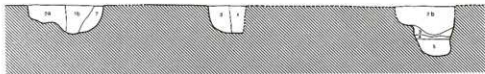
D・E-9区に位置し、第46・49号住居跡を切って構築されていた。第2号掘立柱建物跡の内部に納まっている。また、第4号掘立柱建物跡とは柱穴同士が切り合うが、新旧関係は明確に捉えられなかった。3間×2間の側柱建物で、規模は桁行8.10m、梁行4.80m、柱間寸法は桁行2.70m、梁行2.40mを測る。3間×2間の建物としては規模は大きい部類に属する。但し、東側柱を構成するP₁・P₂の位置がずれ気味で北東隅柱は検出されなかった。主軸方位はN-22°-Wを示す。

柱穴は円形、楕円形、方形と様々であるが総じて大型で、P₃・P₄・P₅は長径1.30mを超え、最小のP₂でも直径60cmを測る。深さは40～80cmで掘り込みはしっかりしている。覆土は基本的に9層に分かれる。第1層は柱痕、または柱を抜き取った痕跡と思われ、締まりの弱い黒色土を基調とする。2層～9層は掘方埋土と推定される。但し3～5層は黒色有機質土を主体としており、別の土壌と重複していた可能性がある。

出土物は少なく、須恵器蓋(第218図2)がP₉から、土師器有段口縁坏(第218図3)と土師器皿(第218図4)がP₇覆土から検出された。重複住居の年代観からみて、出土土器は直接伴うものと思われない。第2号掘立柱建物跡同様、8世紀初頭以降であろう。

0-3000

1:1



- 1 黒色土 締まりなし。
- 1a 黒色土 ローム粒・瀧降り灰に混入。
- 1b 黒色土 焼土粒・ローム粒混入。
- 2 黒色土 ロームブロックとの混土層。
- 2a 黒色土 黒色土主体。
- 2b 黒色土 焼土粒混入。
- 3 黒色土 シルト質土。

- 4 暗黒灰色土 シルト質。有機物混入。
- 5 黒灰色土 シルト質。有機物混入。
- 6 暗褐色土 ローム粒少量混入。
- 7 暗褐色土 ローム粒少量混入。
- 8 黒褐色土 焼土粒少量混入。
- 9 暗褐色土 ロームブロック・焼土粒多量混入。

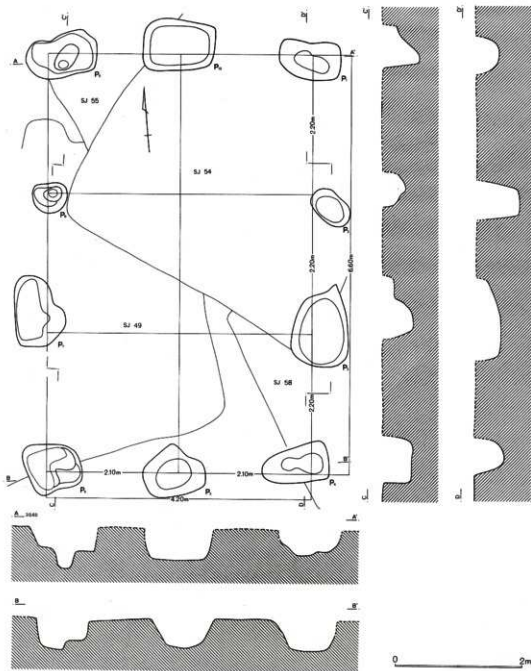
0 2m

第213図 B区第3号掘立柱建物跡(2)

B区第4号掘立柱建物跡(第214図)

D・E-9・10区に位置する。第49・54・58号住居跡、第2・3・5・7号掘立柱建物跡と重複する。新旧関係は第49・58号住居跡を切り、第54号住居跡に切られていた。掘立柱建物跡相互の新旧は明確にできなかった。

3×2間の南北棟の竪柱建物で、規模は桁行6.60m、梁行4.20mを測る。柱間寸法は桁行2.20m、



第214図 B区第4号掘立柱建物跡

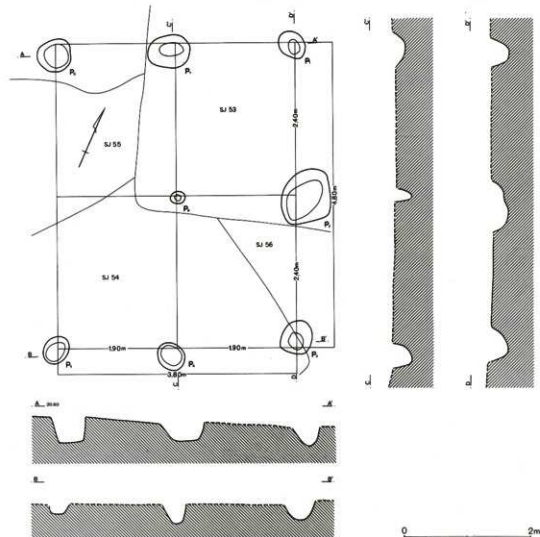
梁行2.10m等間となり、桁行の柱間寸法の方が梁行よりも僅かに長い。P₂は隅柱を結ぶラインから外にずれ、P₃・P₇も同様にずれ気味となっていた。主軸方位はN-4°-Eを示す。

柱穴はP₂・P₈が比較的小規模である他は隅丸長方形に近い形態をとり、規模も長径1m程と大型である。深さは40~70cmと比較的深く掘り込まれている。

遺物は検出されなかった。時期は重複住居の年代からある程度絞られ、凡そ8世紀初頭以降、9世紀後半以前となろう。

日区第5号掘立柱建物跡(第215図)

D・E-9・10区に位置し、第53~56号住居跡、第4・7号掘立柱建物跡と重複する。新旧関係は第53号住居跡よりも新しいことは判明したが、第54号住居跡との新旧は不明である。建物規模は2×2間またはそれ以上となろう。梁行の柱列は棟間隔に揃うが、西側桁行の中間柱が検出されず、東



第215図 日区第5号掘立柱建物跡

側のそれも他のピットに比して掘方規模が大きい。また、P₈は一応東柱の可能性も考慮して取り込んだが柱穴は貧弱である。主軸方位はN-24°-Wを示す。

2×2間の建物とした場合、規模は桁行4.80m、梁行3.80m、柱間寸法は桁行2.40m、梁行1.90mとなり桁行と梁行の柱間寸法は異なる。また、柱間は高床倉庫と思われる通常の総柱建物と比較して広いこと、且つ東柱が貧弱であることから、仮に2×2間の建物としても高床倉庫に擬定することは無理であろう。

柱穴規模はP₉が長径80cmと最も大きく、P₈を除いた他のピットは直径50cm前後、深さは30~40cmほどである。

出土遺物はなく正確な時期決定はできないが、重複住居の年代から7世紀後半以降であることは疑いなく、柱穴形態から中世までは降らないものと推定される。

B区第6号掘立柱建物跡(第216図)

D・E-10区に位置し、第53・56・57・62号の4軒の住居跡を切って構築されていた。3×2間の南北棟の側柱建物で、規模は桁行8.10m、梁行4.00mを測る。柱間寸法は桁行2.70m、梁行2.00mと桁行の柱間が梁行のそれに比して70cmも長く、3×2間の建物としては長大であるといえる。主軸方位はN-17°-Wを示す。

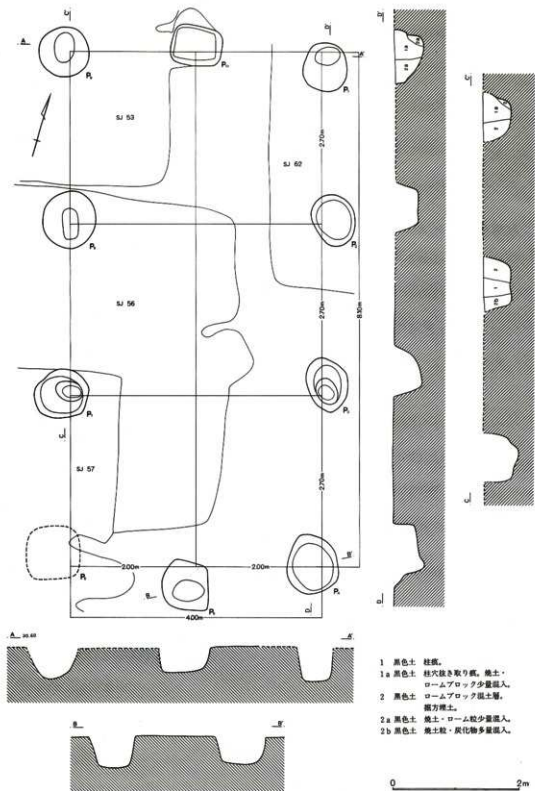
柱穴は楕円形、または隅丸方形で、何れも長径が80cmを超える大型の掘方をもち、深さは40~55cmを測る。P₈は明確に捉えられなかったが本来存在したものと推定される。桁行の柱筋はほぼ揃っていたが、梁行では中間柱であるP₉とP₁₀は隅柱を結ぶラインよりも外側にずれている。出土遺物はP₈とP₁₀から土師器片と小形甕片が出土したが、遺構に直接結びつく遺物とは思われない。重複住居の年代観から7世紀後半以降であるが下限は明確にできない。

B区第7号掘立柱建物跡(第217図)

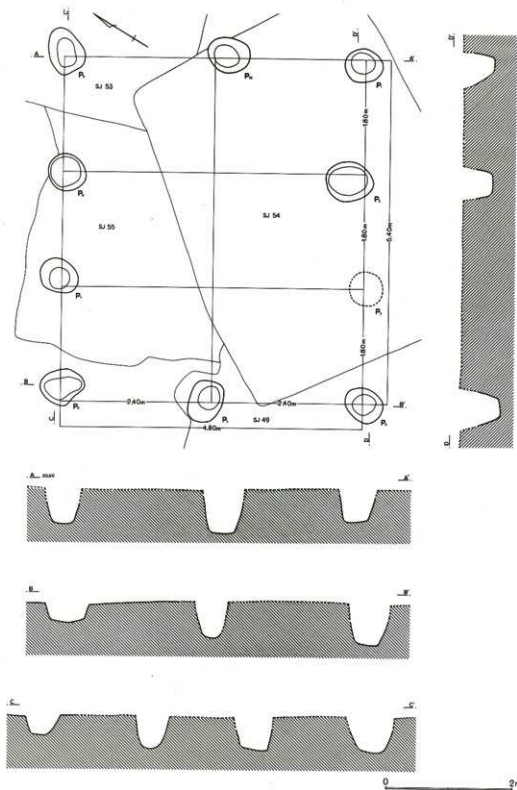
D・E-9・10区に位置する。集落の中心域にあり、多数の遺構と重複していた。第49・53・55号住居跡よりも新しく、第54号住居跡よりも古いものと考えられる。第4・5号掘立柱建物跡との新旧関係は不明である。机上復元した建物であるため不明な点が残るが、一応3×2間の側柱建物と捉えておきたい。規模は桁行5.40m、梁行4.80m、柱間寸法は桁行1.80m、梁行2.40mを測る。3×2間の建物ではあるが、桁行の柱間よりも梁行のそれが長いために正方形に近い形態となる。主軸方位はN-60°-Eを示す。

北辺では柱筋はほぼ揃うが、南辺ではP₉が隅柱を結んだラインよりも内側にややずれ、P₉に相当する柱穴は検出されていない。梁行の柱間柱はP₁₀が中軸線よりも僅かに南に偏っていた。柱穴は円形から楕円形を呈し、規模は長径60cm前後と概ね類似している。深さはP₈が30cmとやや浅いものの、他の柱穴は50~70cm程と比較的深く掘り込みもしっかりしている。柱痕の有無や覆土の詳細は不明である。

遺物は検出されなかった。建物の正確な時期は不明とせざるを得ないが、重複住居の年代から7世紀中葉以降、9世紀後半以前という時間幅の中には納まるものと考えられる。



第216図 B区第6号独立柱建物跡



第217图 B区第7号掘立柱建物跡

B区第8号掘立柱建物跡(第219図)

E-8・9区に位置する。第2号・3号掘立柱建物跡及び第46号住居跡と重複する。新旧関係は明確にできなかったが、住居跡よりも新しく、2・3号掘立柱建物跡よりも古い可能性がある。3×2間の側柱建物と考えられる。規模は桁行7.80m、梁行3.80mを測る。柱間は桁行2.60m、梁行1.90m等間に復元したが、柱穴配置は全体にやや歪んでおり整然と対応しない。主軸方位はN-61°-Eを示す。

各柱穴はP₅を除くと大型で、掘り方形態は方形または長方形を基調としている。柱痕はP₅とP₇で確認された。掘り方は基本的にロームと暗褐色土の混土層で埋められていた。

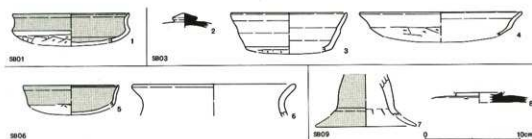
出土遺物はない。建物の時期は8世紀～9世紀代を中心とした年代と思われるが限定は難しい。

B区第9号掘立柱建物跡(第220図)

調査区北東部のC-11・12区に位置し、第72～74号住居跡と重複する。2×2間、またはそれ以上の規模をもつ建物と推定されるが、欠落するビットがあり詳細は不明である。規模は桁行4.00m、梁行3.60mを測る。主軸方位はN-28°-Wを示す。

柱穴は円形から楕円形を呈し、径60cm～100cmと比較的大型である。確認面からの掘り込みはP₇を除くと20cmほどと浅い。柱間寸法は1.80m～2.00mと推定される。柱痕の有無や覆土の状態は不明である。

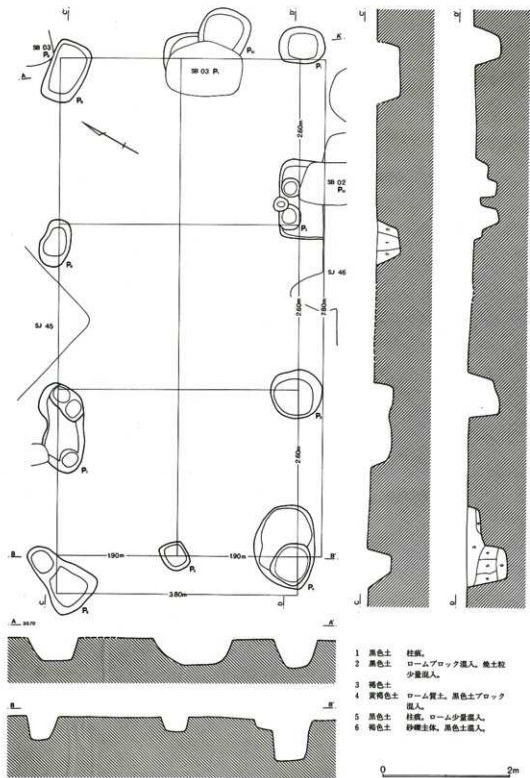
出土遺物はP₇から環状鈕を有する須恵器蓋と古墳時代後期初頭前後の高坏脚部が検出された(第218図7・8)。前者は或いは建物の時期をある程度反映している可能性もある。何れにせよ、重複住居との新旧関係から8世紀初頭以降10世紀初頭以前に構築されたものと推定される。



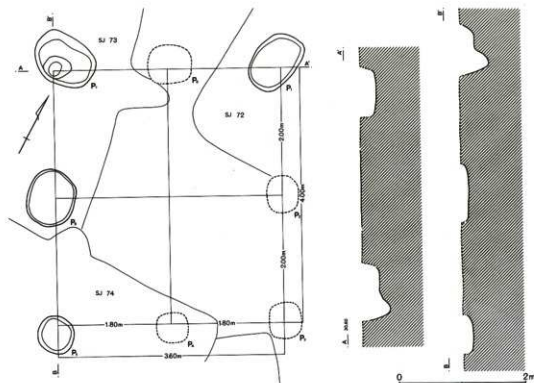
第218図 B区第1・3・6・8号掘立柱建物跡出土遺物

B区第1・3・6・8号掘立柱建物跡出土遺物観察表(第218図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	構成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	(12.2)	3.1		ABC	A	にぶい	20%	SB01-P ₅ 覆土 赤彩
2	蓋		1.5		ABC	A	灰	80%	SB03-P ₅ 覆土
3	坏	(12.0)	4.1		ABE	A	にぶい	15%	SB03-P ₇ 覆土 非在地産
4	皿	(17.0)	2.5		BEF	A	橙	10%	SB03-P ₇ 覆土 北武藏系
5	坏	(10.0)	2.3		ABC	A	にぶい	10%	SB06-P ₅ 覆土 赤彩
6	小形甕	(17.0)	3.3		ABC J	B	にぶい	10%	SB06-P ₁₀ 覆土 磨減している
7	高坏		4.3		ABC	A	浅黄橙	20%	SB09-P ₇ No2 覆土(+7cm) 赤彩
8	蓋		1.1		ABC	A	オリーブ	20%	SB09-P ₇ No5 覆土(+25cm)



第219図 B区第8号掘立柱建物跡



第220図 B区第9号掘立柱建物跡

(3) 井戸跡

B区第1号井戸跡(第221図)

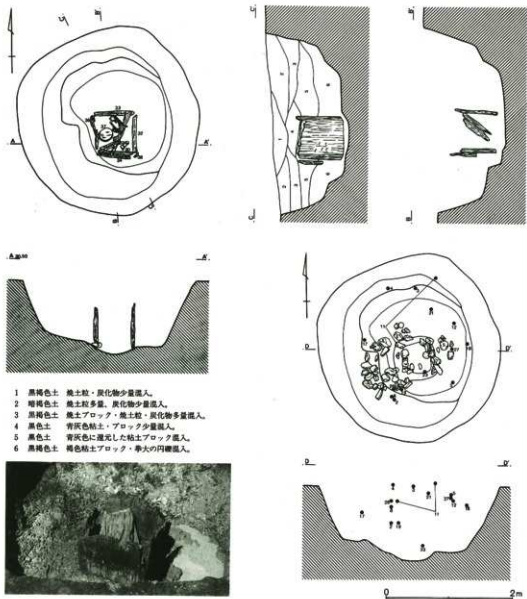
調査区南端のF・G-9・10区に位置し、南に下る台地緩斜面上に構築されていた。形態は円形を呈し、規模は直径5.00m、深さ約1.40mを測り規模は最も大きい。掘方は断面逆台形で、底面中心部は更に一段深く掘り込まれていた。底面には拳大の礫が乱雑に敷かれており、その上に幅60cm程の板材を4枚方形に組み合わせた井戸側が埋設されていた。

井戸側内部には桝板の一部が割れて落ち込んでいた。また、曲物の底板状の木製品、棒状の加工材や木片、多数の土器片が出土した。

覆土は大きく6層に分かれる。黒褐色土を基調とし、第5層・6層は還元した粘土ブロックと円礫が含まれ人為的な堆積状況が窺われた。井戸側の周囲を固めた掘方埋土と考えられる。第1～4層は井戸廃棄後の堆積層と思われる。井戸側内部は暗青灰色のシルト質土が厚く堆積していた。

出土遺物は土師器、須恵器、瓦と木製品がある(第222～224図)。

土師器は坏と皿、甕が検出された。坏は全て破片ではあるが北武蔵型坏の出土が目立つ。須恵器は坏類、蓋、甕、壺・瓶類、鉢が出土した。坏は大振りのものが主体を占める。6・7は扁平な盤状形態で、後者はヘラケズリが中心部まで及ばず回転糸切り痕を大きく残す。底部下端は側方ヘラケズリ。9は相対的に深身で口縁部は長く外反する。蓋は扁平な擬宝珠鈕と環状鈕を持つものがあり、

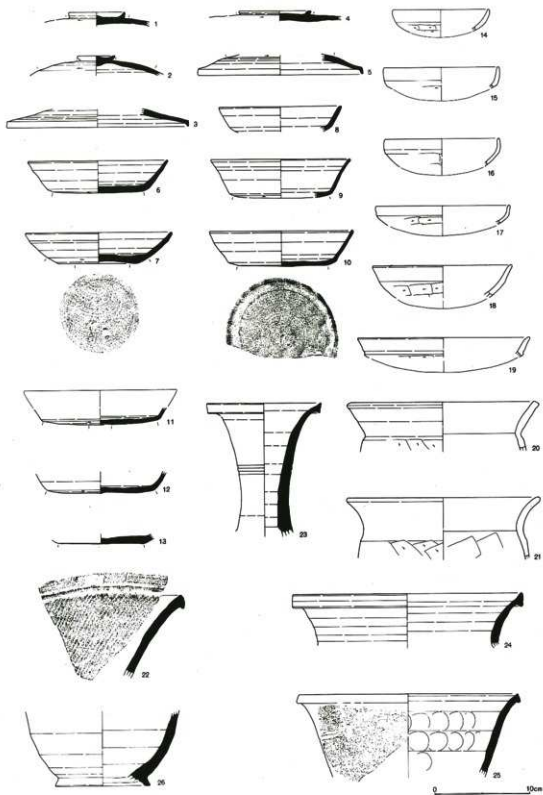


- 1 黒褐色土 焼土粒・炭化物少量混入。
- 2 暗褐色土 焼土粒多量、炭化物少量混入。
- 3 黒褐色土 焼土ブロック・焼土粒・炭化物多量混入。
- 4 黒色土 青灰色粘土・ブロック少量混入。
- 5 黒色土 青灰色に還元した粘土ブロック混入。
- 6 黒褐色土 褐色粘土ブロック・準大の円礫混入。

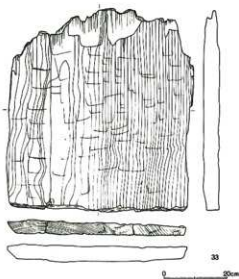
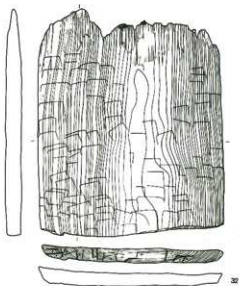
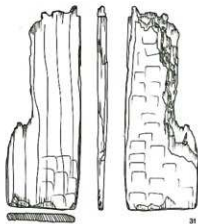
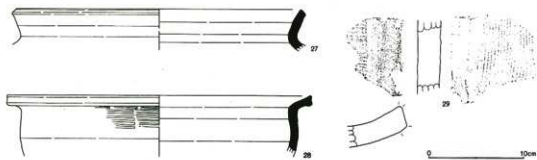
第221図 B区第1号井跡

4の環状鋳は非常に直径が大きい。長頸瓶(23)は頸部に2条の沈線が加えられている。29は平瓦で凸面平行叩き、凹面は布目で杵板状の痕跡が残る。

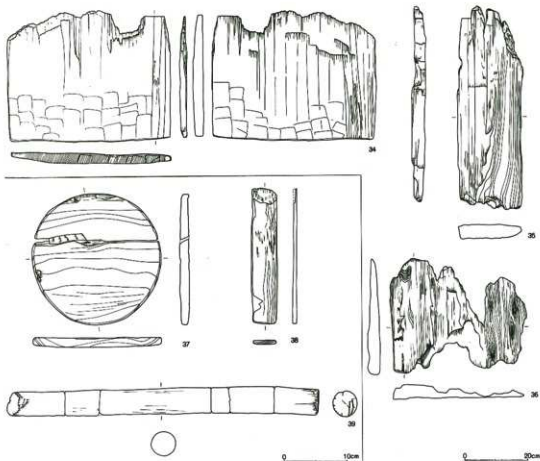
第223図30～33、第224図34～36は井戸側材の一部と思われる。遺存状態のよい部分には手斧で削った痕跡が認められる。37は曲物の底板状の製品であるが、側面の整形は粗く木釘の痕跡も存在しない。別の製品または未製品かもしれない。38は板状製品残欠である。39は直径4cm程の棒状製品で側面は平滑に整えられている。農具の木柄となる可能性もある。出土土器の様相から稻荷前VI期を中心に機能したものと推定される。



第222图 B区第1号井严跡出土物(1)



第223图 日区第1号井严出土遗物(2)



第224図 B区第1号井戸跡出土遺物(3)

B区第1号井戸跡出土遺物観察表(第222~224図)

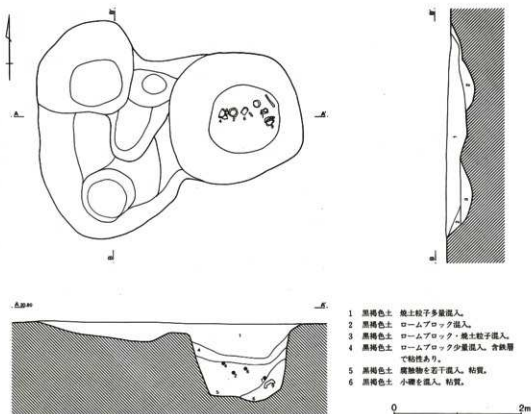
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	蓋		1.5		ABC	A	灰白	80%	底面 つまみ径5.8cm
2	蓋		2.1		ACE	C	灰	25%	No79 覆土(+59cm)
3	蓋	(19.0)	1.9		ABC	A	灰	25%	No33,一括 覆土(+117cm)
4	蓋		1.1		ABC	A	灰	60%	No38 覆土(+120cm)高台状鈕
5	蓋	(17.4)	2.1		AC	C	灰白	20%	No41 覆土(+102cm)
6	坏	(14.6)	3.4	(11.0)	ABC	B	褐灰	20%	覆土 ケズリ径9.6cm
7	坏	15.4	3.3	8.3	ABC	A	灰白	85%	木枠内 覆土
8	坏?	12.8	2.6		ABC	A	灰	15%	No69 覆土(+85cm)
9	坏	(14.6)	4.0	(10.8)	ABC	A	灰	20%	一括 覆土 ケズリ径10.0cm
10	坏	(15.0)	3.7	11.4	ABC	A	灰白	70%	木枠内 覆土
11	坏		1.7	12.7	ABC	A	灰	50%	No3,32 覆土(+92~122cm)
12	坏		2.3	(11.5)	ABC	A	灰白	15%	No43 覆土(+96cm)
13	坏		1.0	9.0	AC	A	灰白	100%	木枠内 覆土
14	坏	(10.0)	2.3		BE	A	におい豊	15%	一括 覆土 北武藏系
15	坏	(12.0)	2.3		ABE	A	におい豊	10%	木枠内 覆土 北武藏系
16	坏	(11.9)	2.9		ABE	B	におい豊	10%	木枠内 覆土 北武藏系
17	坏	(14.0)	2.1		BE	A	におい豊	15%	No66 覆土(+76cm) 北武藏系か

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
18	柄	(14.5)	3.4		BCE	A	にひ焼	15%	No59 覆土(+88cm)
19	皿	(18.0)	2.1		AB	A	にひ焼	15%	No77 覆土(+58cm) 在地系
20	甕	19.0	5.2		ABC F	B	にひ焼	10%	一括 覆土
21	甕	20.0	6.5		ABE J	B	橙	20%	No29 覆土(+107cm)
22	甕	42.0	8.6		ABC	A	灰	10%	木枠内
23	長頸瓶	12.0	13.9		ABC	A	灰	80%	No84 木枠内覆土(+23cm)
24	壺	(24.0)	5.7		ABC	A	灰	10%	覆土
25	甕	(23.0)	8.7		ABC	A	灰	20%	木枠内
26	長頸瓶		7.8	(10.0)	ABC	A	灰	15%	No6 覆土(+93cm)
27	短頸壺	(30.0)	4.3		ABC	B	灰	10%	No24 覆土(+100cm)
28	鉢	(32.0)	6.4		ABC	A	灰	10%	木枠内
29	平瓦				ABC	C	黄灰		覆土

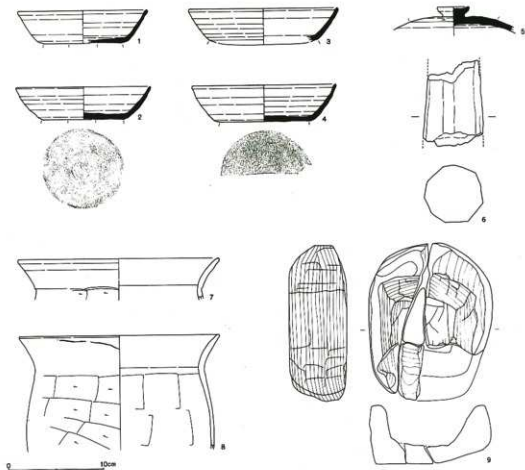
日区第2号井戸跡(第225図)

調査区西端部のE-1・2区に位置する。井戸本体の西側に土塊状の浅い掘り込みが付属する。土塊状施設の性格は不明であるが、土層観察から両者は同時期に機能していた可能性がある。井戸の形態はほぼ円形で、規模は直径2.10～2.30m、深さ1.25mである。断面形は概ね逆台形を呈する。

覆土は6層に分かれる。第1層は土塊状施設と井戸の上層を被覆していた。第4層以下は井戸埋



第225図 日区第2号井戸跡



第226図 B区第2号井戸跡出土遺物

土である。第4層は鉄分凝集層。その下部は黒褐色の有機質土で構成され粘性が強い。

出土遺物は第5層、6層から主に出土した。須恵器坏、蓋、土師器甕と土製支脚、木製容器がある(第226図)。須恵器坏(1~4)は盤状の形態で、底部は平底風、口縁部は内湾気味に立上がるものである。土師器甕(7・8)は武藏型甕の系譜に連なるもので口縁部の屈曲は弱く胴部上位は横方向の篋削りが施される。9は木製割りもので、容器であろう。全体の1/4程を欠いている。平面形態は楕円形に近く、大きさは長さ16.4cm、幅13.0cm、厚さ6.0cmで片面は手斧で雑に抉られている。側面及び底面にも手斧痕を残す。未製品の可能性もあろう。出土土器の様相から8世紀前半、稲荷前VII期と考えられる。

B区第2号井戸跡出土遺物観察表(第226図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	(13.5)	3.5	8.2	ABC	A	灰白	40%	Na5 覆土(+37cm)
2	坏	14.0	8.6	3.4	ABC	B	灰白	95%	Na2 覆土(+44cm)
3	坏	(15.5)	3.5		AC	B	灰	10%	覆土 全体に風化
4	坏	(15.0)	9.4	3.8	ABC	A	灰	40%	Na1 覆土(+49cm)
5	蓋		3.0		ABC	A	紫灰	60%	覆土 天井部ヘラケズリ

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
6	支脚				ABC	B	におい豊		No.3 覆土(+52cm) 最大径(6.3cm)
7	甕	(21.0)	4.3		ABI	A	豊	25%	覆土
8	甕	(21.0)	12.0		ABEJ	A	におい豊	20%	覆土

B区第3号井戸跡(第227図)

C-10区に位置する。形態は円形を呈し、規模は直径1.34m、深さ0.98mを測り、円筒状に掘り込まれていた。底面は中心部に向かって僅かに深くなる。

覆土は5層に分かれる。第4層は鉄分沈殿層で、堅く締まっていた。第5層は黒色有機質土で、粘性が強い。

出土遺物は円筒埴輪片(第228図1)1点と小形瓦(第228図2~16・第229図17~24)が24点検出された。出土位置の判明するものは全て第1層及び第2層に相当する深さから検出された。直接井戸跡に伴うものではなく、ある程度埋没した段階で流入、または投棄されたものであろう。

円筒埴輪(1)は縦方向の刷毛目が施文され残存部下端には断面三角形の低い凸帯が巡る。

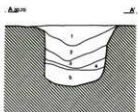
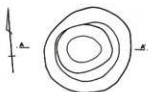
小形瓦には軒丸瓦、丸瓦、平瓦、隅切瓦がある。

隅切瓦(2)は平瓦の一侧縁がヘラ状工具によって斜めにカットされている。凹面、凸面は共に横方向のナデ、端面はヘラケズリ後ナデ調整が施されている。

軒丸瓦(3)は瓦当面の直径10.1cmを測る。瓦当面は界線で区画され、中房を含めて全体の1/4程が剥落していた。瓦当文様は単弁4葉の退化形態とも考えられるもので、中房から界線に至る2本1対の棒状凸線で表現される。界線から中心部に向かって尖る三角形の突起は間弁を表現したものである。丸瓦との接合部は段が作り出され、いわゆる印籠接ぎ技法によって接着したものと考えられる。

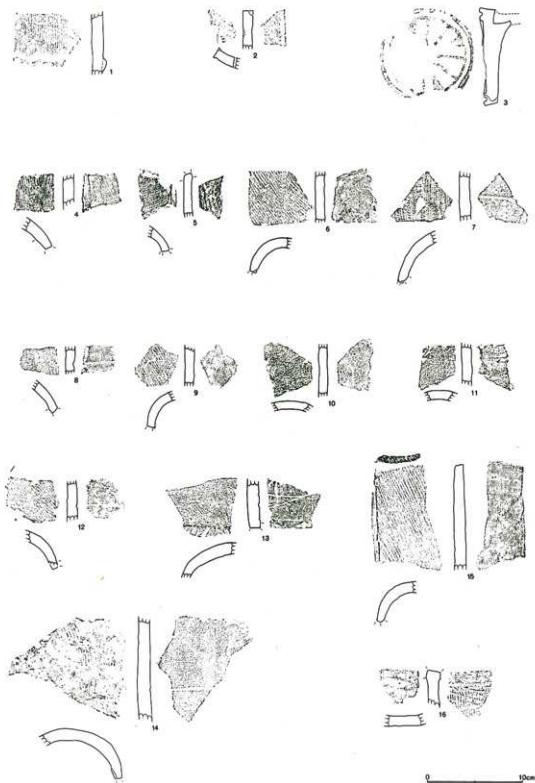
4~15は丸瓦で全て小片である。基本的な調整は凸面が平行叩き、凹面が2cmあたり、縦糸、緯糸ともに16~18本程の目の細かい布目が残る。端面は削り、または削り後のナデが加えられる。バリエーションとしては凸面または凹面がナデ(或いはヘラナデ)調整されるもの、広端面・狭端面にも凸面に使用されたものと同一原体による平行叩きが施されるものが認められる。また凹面に紐状圧痕が観察される例が見られる(7・8・12~14)。おそらく、瓦制作時に型の周囲に巻いた布は緞じ合わせによらず、紐を使って数箇所緊縛されたものと理解される。焼成は灰色を呈し須恵質に焼きあがるものと、やや軟質で灰白色、または横灰色に焼成されるものがある。

16~24は平瓦。凹面はナデ、凸面は平行叩き、端面はヘラケズリ調整を基本とする。丸瓦同様、端面にも平行叩き痕を残すものが観察される。色調や焼成は丸瓦と同様である。

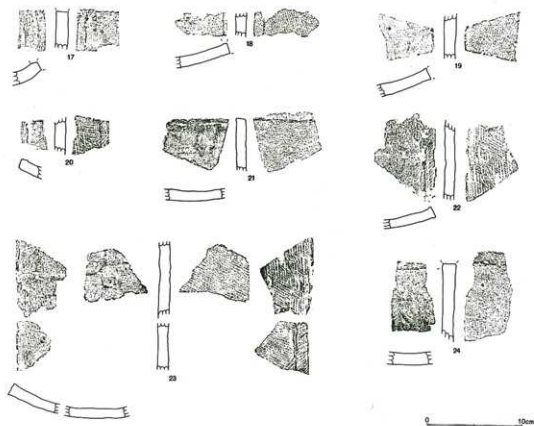


- 1 暗褐色土 少量のローム粒混入、微量の炭化物、少量のローム粒混入。
- 2 暗褐色土 少量のローム粒混入。
- 3 暗褐色土 鉄分沈殿層、硬くしまる。
- 4 暗褐色土 鉄分沈殿層、硬くしまる。
- 5 黒褐色土 粘性強い。

第227図 B区第3号井戸跡



第228图 B区第3号井严跡出土遗物(1)



第229図 B区第3号井戸跡出土遺物(2)

B区第3号井戸跡出土遺物観察表(第228~229図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	構成	色調	残存	出土位置・その他
1	埴輪				ABE	B	橙		覆土 円筒埴輪
2	隅切瓦								No.6 覆土(+78cm)
3	軒丸瓦				AC	A	灰白		覆土 瓦当面径10.1cm
4	丸瓦				AC	A	灰白		覆土
5	丸瓦				ABC	A	灰白		No.10 覆土(+73cm)
6	丸瓦				ABC	A	黄-7灰		No.12 覆土(+74cm)
7	丸瓦				ABC	A	淡黄		No.16 覆土(+58cm)
8	丸瓦				ABC	A	淡黄		No.18 覆土(+63cm)
9	丸瓦				ABC	A	黄-7灰		覆土
10	丸瓦				ABC	A	灰白		No.17 覆土(+53cm)
11	丸瓦?				ABC	A	灰		覆土
12	丸瓦				ABC	B	灰白		No.2 覆土(+89cm)
13	丸瓦				ABC	A	灰		覆土
14	丸瓦				AC	A	灰白		覆土
15	丸瓦				AC	A	灰白		覆土
16	平瓦				ABC	A	灰白		No.33 覆土(+77cm)
17	平瓦				ABC	B	灰		No.19 覆土(+74cm)
18	平瓦				ABC	A	黄-7灰		覆土
19	平瓦				ACJ	B	灰白		覆土

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
20	平瓦				ABC	B	淡黄		No21 覆土(+55cm)
21	平瓦				ABC	A	灰		No23 覆土(+49cm)
22	平瓦				ABC	B	灰白		覆土
23	平瓦				ABC	C	灰白		No24 覆土(+48cm)
24	平瓦				ABC	A	灰		覆土

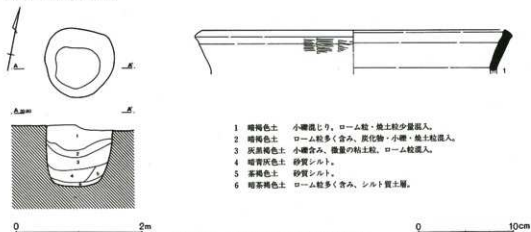
B区第4号井戸跡(第230図)

D-8区に位置する。第8号方形周溝基南周溝を切っていた。また、第44号住居跡と重複し、新旧関係は本井戸跡の方が古いものと推定される。形態は円形で、規模は直径1.10m、深さ0.98mを測る。円筒状に掘り込まれ、底面は平坦である。

覆土は6層に分かれ、上層(第1～3層)には礫の混入が目立つ。下層は青灰色に還元したシルト質土が堆積していた。

出土遺物は少なく、図化し得たものは須恵器鉢の1点に留まる(第230図1)。

第230図1は須恵器鉢の小片である。推定口径32cmで胎土に石英、白色針状物質を含む。焼成は良好で灰色を呈する。外面に平行叩き痕が僅かに残る。正確な時期比定はできないが9世紀代に下がるものではなからう。



第230図 B区第4号井戸跡・出土遺物

B区第5号井戸跡(第231図)

調査区中央部のD-7区に位置する。形態は円形で、規模は直径1.28m、深さ1.00mを測る。壁面は垂直に掘り込まれているが、一部は壁面が崩壊しオーバーハングしていた。

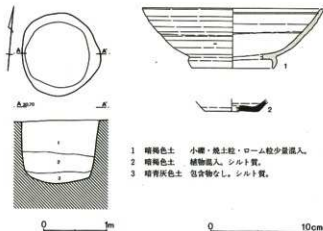
覆土は3層に分かれる。第2層は暗褐色シルト質土で有機物を混入する。最下層の第3層には暗青灰色のシルト質土が堆積していた。

出土遺物は少なく、覆土中から灰軸陶器の椀と須恵器杯が検出された。時期決定には資料不足ではあるが、土器様相からみると稲荷前XIV期頃と考えてよからう。

第231図1は灰軸陶器の椀で口縁部内面に沈線が巡る。灰軸は濱け掛けか。体部下半は回転ヘラケ

ズリされる。底部外面は回転ヘラケズリ後ロクロナデと思われる。高台は付け高台で内湾している。法量は推定口径19.0cm、器高6.2cm、底径8.6cm。焼成は良好で、色調は灰白色。約20%が残存する。胎土から東濃産と考えられる。

2は須恵器帯で底部は回転糸切り後無調整である。推定底径は5.8cm。胎土に石英、白色粒子と白色針状物質を含み、焼成は普通。色調は灰色で、残存率は約15%である。



- 1 暗褐色土 小礫・焼土粒・ローム粒少量混入。
- 2 暗褐色土 植物混入、シルト質。
- 3 暗青灰色土 包含物なし、シルト質。

第231図 B区第5号井戸跡・出土遺物

(4) 土壌

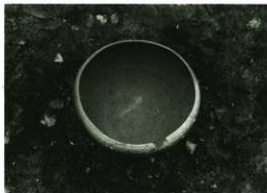
古墳時代後期から平安時代に帰属すると推定される土壌は33基ある。規模等の詳細は巻末の土壌一覧表に記載した。遺構は第232・234・235図に、出土遺物は第233・236・237図に示した。ここでは、特に注目される土壌について概要を記すに留める。

B区第40号土壌(第234図)

調査区北西部のB-11区に位置する。長楕円形を呈し、深さは10cm程と浅い。小形の丸瓦が6点、平瓦が1点出土した。出土状態は不明であるが周囲から流入したか、投棄されたものであろう。丸瓦は凸面平行叩き、凹面には布目が残る。端面削りを施すものと平行叩きを残すものがある(第237図)。土壌自体の性格は明らかにできなかった。

B区第54号土壌(第235図)

D-11区に位置し、第75号住居跡内から検出された。新旧関係は本土壌の方が新しい。形態は隅丸長方形で、規模は長軸2.86m、短軸1.66m、深さ0.36mを測る。覆土にはロームが霜降り状に含まれ、人為的な堆積状態とみることもできる。遺物はほぼ完形の須恵器鉄鉢形(第237図37)と刀子(38)が検出された。土師器帯(36)は混入と考えられる。性格については不明であるが、大きさや形態、埋土の状況から土壌墓の可能性もある。須恵器鉄鉢は東壁に接する位置から出土。薄手で端正な作りである。胴部中位以下は回転ヘラケズリ調整。

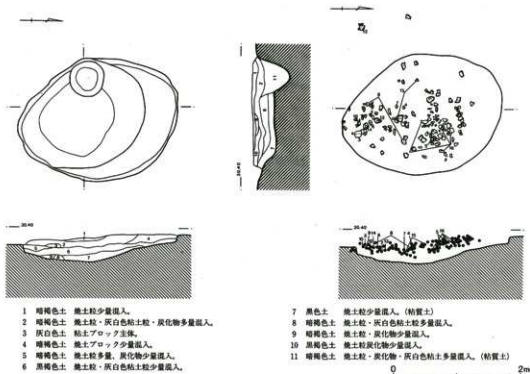


B区第54号土壌土器出土状況

B区第61号土壌 (第232図)

調査区南端のF-10区に位置する。形態は楕円形で、規模は長径2.46m、短径1.92m、深さ0.44mを測る。底面は皿状に凹む。ピットが1基重複し、埋土中位から切り込まれていた。覆土は10層に分かれ、全体に焼土と灰白色粘土が多量に含まれていた。

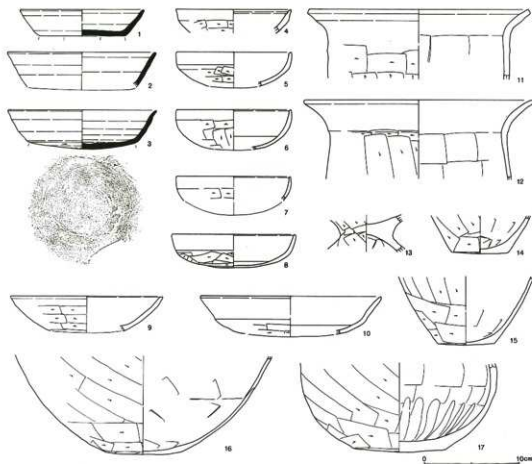
出土遺物は土師器環類、甕、台付甕、須恵器環類が検出された(第233図)。出土レベルは覆土上層に集中し、遺構の掘り込みラインの外側からも検出されている。遺構に直接伴うとするのは難しく、土器溜りのなあり方であろうか。遺構の性格は不明である。



第232図 B区第61号土壌

B区第61号土壌出土遺物観察表 (第233図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	環	(13.0)	2.8	(9.0)	ABC	A	灰白	30%	覆土
2	環	(15.6)	3.7		ABC	A	灰白	15%	No20 覆土(+19cm) 底部欠
3	環	15.6	4.1	11.9	ABJ	D	褐灰	70%	No4 覆土(+30cm)
4	環	(12.0)	2.5		ABC	A	灰黄褐	15%	No35 覆土(+31cm) 無彩
5	環	(12.0)	3.6		ABE	B	にんげん	20%	No57,58 覆土(+34~35cm)
6	環	(12.0)	4.1		ABE	B	にんげん	10%	No10 覆土(+26cm) 北武藏系
7	環	(12.0)	2.5		ABE	B	橙	15%	No31 覆土(+22cm) 北武藏系
8	環	(12.9)	3.5		ABE	A	浅黄橙	50%	No15,44 覆土(+23~32cm)
9	環	(16.0)	3.6	(8.3)	ABC	A	橙	10%	No6 覆土(+26cm)
10	皿	(19.0)	3.9		ABE	B	にんげん	10%	No5 覆土(+26cm) 北武藏系
11	甕	(23.0)	7.3		ABEH	B	橙	15%	覆土 白色針不明瞭
12	甕	(12.4)	8.3		ABEF	A	にんげん	15%	No108 覆土(+30cm)

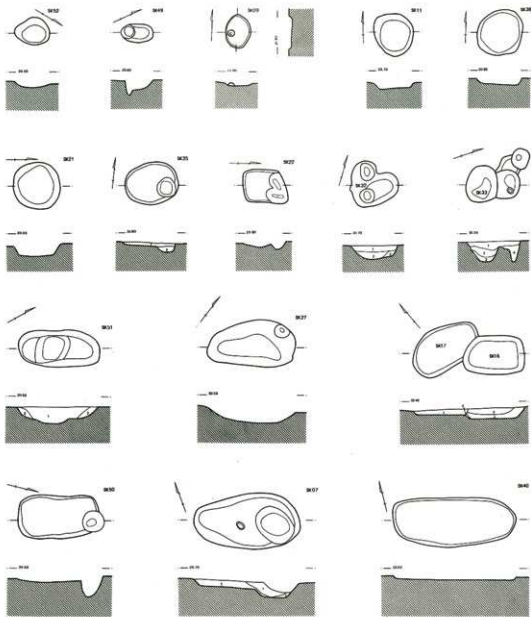


第233図 B区第61号土壌出土遺物

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
13	台付甕		3.9		ABEJ	B	橙	80%	No.22 覆土(+22cm) 武藏型
14	甕		4.0	6.0	ACI	A	におい橙	70%	No.9 覆土(+25cm)
15	甕		7.0	6.0	ABEF	B	浅黄橙	35%	No.33, 103 覆土(+18~30cm)
16	壺		10.2	(8.0)	AB	A	におい橙	20%	No.54, 86他 覆土(+23~35cm)
17	壺		9.3	9.8	ABC	A	浅黄橙	70%	覆土 底部内面指ナデ痕明瞭

B区古墳時代後期～平安時代の土壌出土遺物観察表(第236・237図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	(12.8)	25.6		ABC	B	灰黄褐	10%	S K05覆土 赤彩
2	坏	(12.4)	2.6		ABC	D	浅黄橙	15%	S K05覆土 赤彩 風化著しい
3	坏	(12.3)	3.0		ABC	B	におい黄	15%	S K05覆土 赤彩 風化著しい
4	坏	(12.6)	2.8		ABC	A	橙	15%	S K05覆土 赤彩
5	坏	(12.7)	2.8		ABCE	B	灰黄褐	15%	S K05覆土 無彩
6	椀	14.0	6.0	7.2	ACE	C	淡黄	100%	S K09覆土 底部回転承切り
7	蓋	18.2	4.7		ABC	B	淡黄	95%	S K15覆土 全体に厚手 鉋径3.5cm
8	平瓦				ABC	B			S K16覆土
9	蓋	(11.0)	1.2		ABC	A	灰白	20%	S K28No.7 覆土(+50cm) 壺蓋

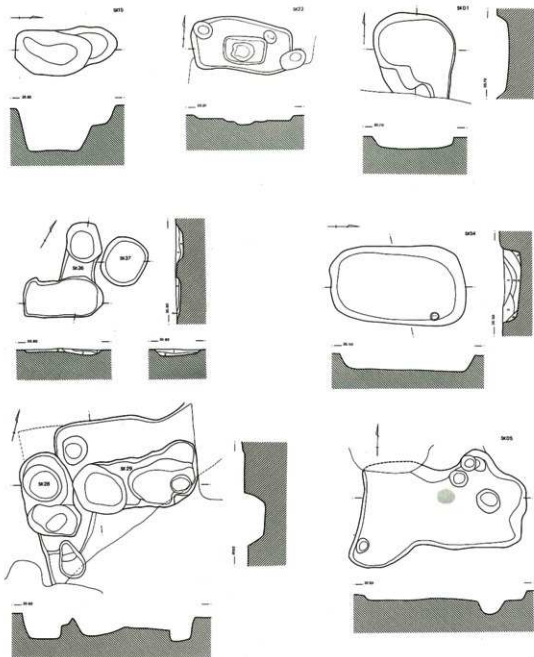


- SK07
 1 黒褐色土 混入物は殆ど含まない。
 2 黒褐色土 褐色地山土をブロック状に混入する。
- SK16・17
 1 灰褐色土 多量の小礫と少量のローム粒混入。
 2 暗灰褐色土 少量の炭化物、焼土粒混入。
 3 炭化物層 炭化物主体、暗灰褐色土と少量の焼土粒混入。
 4 灰黄褐色土 ローム粒・小礫混入。
- SK32
 1 暗褐色土 ローム粒多量、焼土粒・炭化物少量混入。
 2 暗褐色土 ローム粒・焼土粒・炭化物少量混入。
 3 暗黄褐色土 ローム粒多量、焼土粒微量混入。

- SK33
 1 暗黒褐色土 径1-3cm大の礫混入。
 2 黒褐色土 砂礫粒少量混入。
 3 暗褐色土 ローム粒少量混入。
 4 褐色土 ローム粒少量混入。
- SK35
 1 暗褐色土 ローム粒少量混入。
 2 黒褐色土
- SK51
 1 黒褐色土 ローム粒・焼土粒少量混入。
 2 暗褐色土 1層に類似、砂礫多量混入。

0 2m

第234図 B区古墳時代後期～平安時代の土壌(1)



S K 36

- 1 黒褐色土 ローム粒・砂礫少量混入。
- 2 暗褐色土 粘土ブロック。
- 3 暗褐色土 砂礫粒少量混入。

S K 37

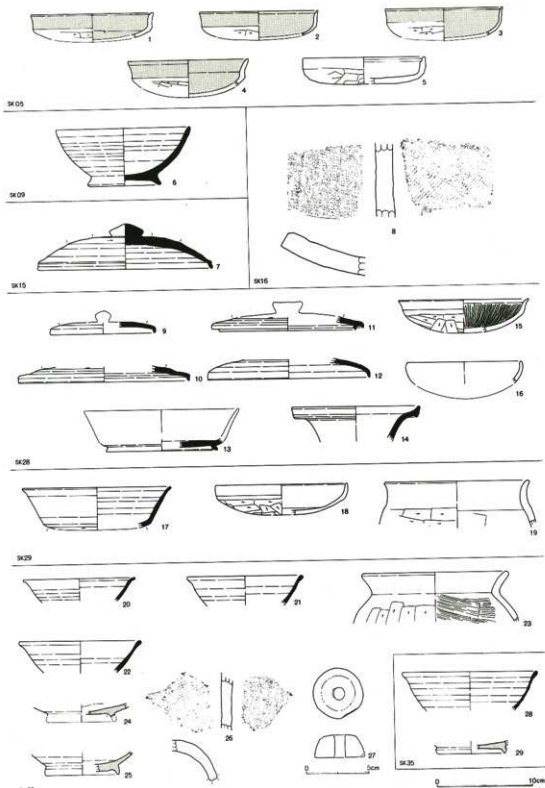
- 1 暗褐色土 ローム粒少量混入。
- 2 暗褐色土 径2～3cm大の礫混入。

S K 41

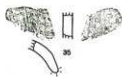
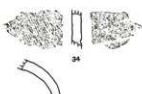
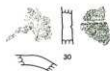
- 1 暗褐色土 ローム粒を斑状に含み、微量の炭化物混入。
- 2 暗褐色土 ローム粒を斑状に多量混入。
- 3 暗褐色土 ローム粒多量混入。厚縁は露障り状を呈する。
- 4 暗褐色土 ローム粒少量混入。やや粘性あり。
- 5 暗黄褐色土 ローム主体、暗褐色土混入。

0 2m

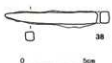
第235図 B区古墳時代後期～平安時代の土坑(2)



第236図 日区古墳時代後期～平安時代の土壘出土遺物(1)



SK40



SK54

0 5cm
0 10cm

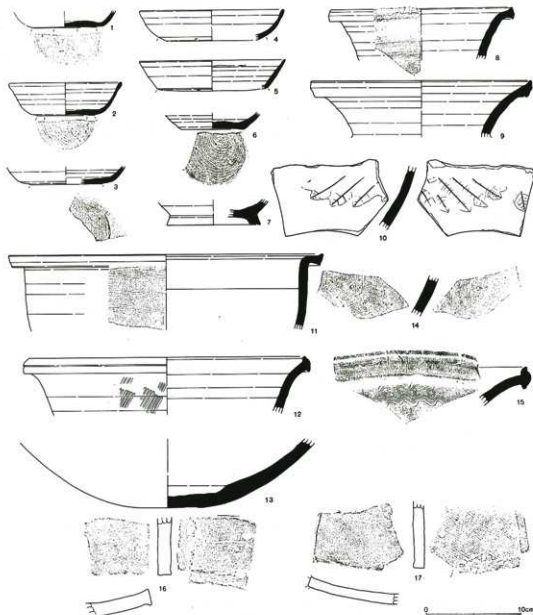
第237図 日区古墳時代後期～平安時代の土壌出土遺物(2)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
10	蓋	(18.0)	1.6		ABC	B	灰	15%	S K 28覆土
11	蓋	(16.0)	1.4		ABC	B	灰	25%	S K 28No.16 覆土(+13cm)
12	蓋	(17.0)	2.0		ABC	A	灰白	10%	S K 28覆土 釜の可能性もある
13	高台坏		1.2	(11.8)	ABC	B	灰	40%	S K 28No.14 覆土(+52cm) SK29と接合
14	長頸瓶	(13.4)	3.7		ABC	A	灰	25%	S K 28No.15 覆土(+40cm)
15	坏	(13.6)	3.4		AE	A	橙	20%	S K 28No.2 覆土(+50cm)
16	坏	(11.8)	2.3		ABE	B	橙	5%	S K 28No.6 覆土(+44cm) 北武藏系
17	坏	(15.6)	4.3	(11.3)	ABC	A	オリ-7系	10%	S K 29No.7 覆土(+16cm)
18	坏	(13.7)	3.2		ABE	A	にふいき	25%	S K 29No.1 覆土(+35cm) 北武藏系
19	小形甕	(15.0)	4.9		ABCE	B	にふいき	15%	S K 29No.11 覆土(+13cm)
20	坏	(11.6)	2.4		AB	A	オリ-7系	15%	S K 33覆土
21	坏	(11.9)	3.1		ACE	A	灰白	10%	S K 33覆土
22	坏	(12.6)	3.4		AC	B	にふいき	10%	S K 33覆土
23	甕	(15.0)	5.2		ACE	A	淡黄	20%	S K 33覆土
24	皿		1.5		B	A	灰白	15%	S K 33覆土
25	碗		2.4	7.6	B	A	灰白	30%	S K 33覆土 東濃産
26	丸瓦				ABC	A	灰白		S K 33覆土
27	紡錘車								S K 33覆土 径4.0cm 最大厚1.8cm
28	坏	(14.0)	4.1		BC	B	灰白	10%	S K 35No.2 覆土(+4cm)
29	碗		1.3	(7.0)	B	A	オリ-7系	20%	S K 35No.1 覆土(+2cm)
30	丸瓦				ABC	A	灰白		S K 40覆土
31	丸瓦				ABC	A	淡黄		S K 40覆土
32	丸瓦				ABC	A	灰		S K 40覆土
33	丸瓦				ABC	A	灰白		S K 40覆土
34	丸瓦				ABC	A	オリ-7系		S K 40覆土
35	丸瓦				ABC	A	淡黄		S K 40覆土

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
36	坏	(12.2)	3.5		ABC	A	により	40%	S K54No2 覆土(+5cm) 赤彩 混入
37	鉄鉢形	16.8	9.2		ABC	A	暗灰	100%	S K54No1 覆土(+18cm)
38	釘								S K54覆土 残長7.3cm 最大幅0.9cm

(5) 包含層

B区とC区を隔てる谷部の北端(B-14・15区付近)からは上層の堆積土を除去した段階で混土礫層が露出した。その中には8～9世紀段階の須恵器破片と若干の土師器がコンテナ1箱分程包含され



第238図 B区包含層出土遺物

ていた。出土遺物のほとんどが磨滅しており二次的に混入したことは間違いないであろう。おそらく河川の氾濫等に起因する土砂に混じって堆積したものと推定される。但し、磨滅度は比較的弱く遠距離から移動したものではなかろう。出土遺物の一部はC区に属するがB区包含層としてここでまとめて掲載する。

第238図1～6は須恵器環で8世紀前半～9世紀後半までのものが含まれている。3の底部は手持ちヘラケズリが施されている。10・14は甕の胴部片で、表裏両面に木の葉圧痕が列状に付されている。同一技法は鳩山窯跡群広町B4号窯に特徴的にみられる。同窯の製品であろうか。16・17はB区に特徴的な小形の平瓦である。

B区包含層出土遺物観察表(第238図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	環		1.7	6.8	ABC	A	灰	50%	B-14区 底部外周回転ヘラケズリ
2	環	(11.6)	3.4	6.0	ABC	B	灰	40%	B-14区 底部外周手持ちヘラケズリ
3	環		1.8	(7.6)	ABC	B	灰	20%	B-14区 底部手持ちヘラケズリ
4	環	(15.0)	3.2	(9.8)	ABC	A	暗灰	10%	B-14区 体部下端ケズリと思われる
5	環	15.2	3.0	11.6	ABC	B	灰	15%	B-14区 底部回転ヘラケズリ
6	椀		1.7	6.6	AB	B	灰	55%	B-14区 底部「二」状のヘラ記号あり
7	瓶		2.6	(9.7)	ABC	A	灰白	40%	B-14区
8	壺	(19.0)	5.4		ABC	A	灰	15%	B-15区
9	壺	(23.0)	5.9		ABC	A	暗灰	10%	B-14区
10	甕				ABC	A	灰白		B-15区
11	鉢	(33.0)	7.9		ABC	A	灰	10%	B-14区
12	甕	(29.0)	6.0		AB	A	暗灰	10%	B-14区 外面平行叩き後ロクロナデ
13	大甕		7.2		ABC	A	灰	20%	B-14区 丸底甕 底部磨滅
14	甕				AB	A	灰		B-14区
15	大甕				ABC	A	暗灰		B-14区
16	平瓦				ABC	J	淡黄		B-14区 磨滅著しい
17	平瓦				ABC	C	黄灰		B-15区



◀発掘調査風景

4 中・近世の遺構と遺物

B区で検出された中・近世の遺構は、掘立柱建物跡6棟、井戸跡7基、土壇11基、溝跡11条である(第239図)。掘立柱建物跡は調査区の中央から東側にかけて検出された。第12号掘立柱建物跡と第14号掘立柱建物跡が重複する他は、分布は散在的である。また、主軸方位にもまともはみられない。しかし、この地域には多数のピットが群在しており、おそらくの中には建物が相当数含まれていたものと推定される。溝跡は主に調査区西域に分布していた。その中でも第3号溝跡とそれを取りまく溝跡は中世の屋敷を区画する溝と推定される。その北側にある第1号溝跡は同様に区画溝の可能性はあるが、時期的にはやや新しく近世初期頃まで下がるかもしれない。井戸跡は調査区南半に多く区画溝内からも検出されている。出土遺物は主に井戸跡と溝跡から検出された。船載陶磁器の青磁碗、瀬戸美濃産の陶器、常滑焼の甕、在地産軟質陶器などがある。

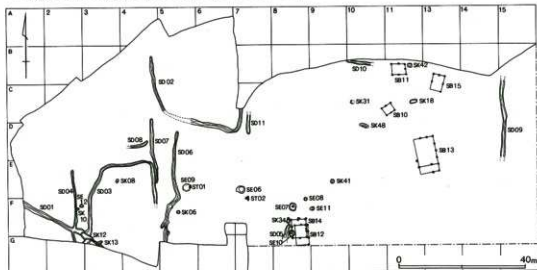
(1) 掘立柱建物跡

B区第10号掘立柱建物跡(第240図)

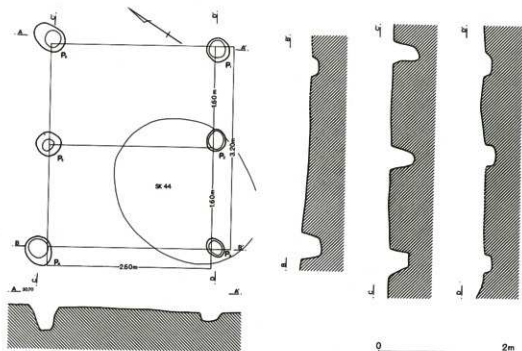
C-10・11区に位置する。第44号土壇と切り合うが、新旧関係は不明である。現状では2×1間の建物であるが、周囲に広がる可能性もある。規模は桁行3.20m、梁行2.60m、主軸方位はN-56°-Eを示す。

柱穴配置は若干不揃いで、梁行の中間柱は検出されなかった。柱穴は直径30~40cm前後と小さい。深さは北西側柱列は40cm程と比較的深いが、南東側のそれは浅い。覆土は暗褐色土を基調としていた。柱痕の有無、掘り方の詳細は不明である。

出土遺物はなく時期は不明であるが、柱穴形態や規模から中世の建物と考えておきたい。



第239図 B区中・近世の遺構配置図



第240図 B区第10号掘立柱建物跡

B区第11号掘立柱建物跡(第241図)

調査区東寄りの北端部、B-11区に位置する。重複する第40号土壌は建物に伴わなないものと推定される。2×2間の東西棟の建物で、規模は桁行4.40m、梁行3.40mを測る。主軸方位はN-88°-Wを示す。

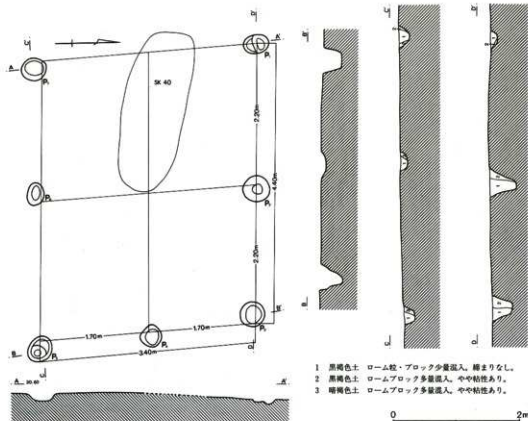
柱穴配置はやや歪み、平行四辺形状となる。西側梁行の柱間柱は検出されなかった。柱間寸法は桁行2.20m、梁行1.70mを測る。柱穴形態は円形で直径30cm~40cmと小さい。深さは一定せず深いもので40cm、浅いものでは10cmほどであった。断面観察から柱痕(抜き取り痕)とその周囲に僅かながらロームブロックを多量に含む掘方部分を有する。

出土遺物は検出されず正確な年代比定はできないが、古代の建物にしては柱穴が小規模であり、覆土の様相からみてもおそらく中世段階の所産と推定される。

B区第12号掘立柱建物跡(第242図)

調査区中央部最南端のF・G-8区、南に下る緩斜面に位置する。第14号掘立柱建物跡と重複するが、新旧関係は明確に捉えられなかった。両者は主軸が揃い、斜めにずれて構築されていることから近接時期に建替えられたと見ることもできよう。西側柱列は倒木痕による攪乱と斜面の影響もあって北西の隅柱が検出されたに留まる。規模を確定することはできないが、一応3×2間の南北棟の建物と考えておく。規模は桁行6.30m、梁行4.00m、主軸方位はN-4°-Wを示す。

柱間寸法は桁行2.10m、梁行2.00m等間となる。柱穴は全体に小規模で、斜面下のP₅を除くと深さは概ね30~40cm程である。



第241図 B区第11号掘立柱建物跡

柱穴覆土は3層に分かれる。全体に谷に特有の黒褐色土で形成され、第1層は柱穴抜き取り痕、第2層は掘り方埋土であると思われる。

出土遺物は土師器片が1点、P₁内から検出された。形態から8世紀初頭を前後する段階のものと思われ、混入の可能性が高い。時期は不明であるが、柱穴形態や14号掘立柱建物跡との関係から中世と推定される。

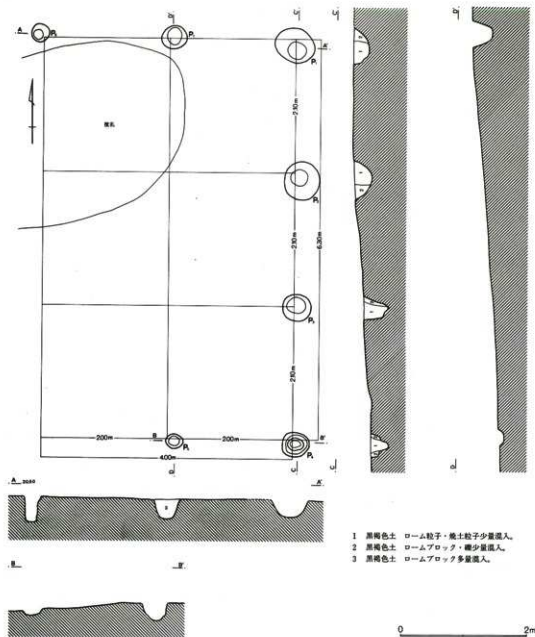
B区第13号掘立柱建物跡(第243図)

D・E-11・12区に位置し、第75・77号住居跡、第50号土壇を切って構築されていた。机上で復元した建物であり、規模や柱穴配置など不明な点が残ってしまった。一応東側の柱筋がほぼ揃い、且つ柱間距離が均等であるため1棟としたが、北側に2×2間の建物、その南側に3×2間の東西棟の建物が2棟軸を揃えて併存していたと考えることもできる。

ここでは1棟の場合で説明すると、規模は桁行11.00m、梁行6.00mとなり、非常に大型建物に復元できる。柱間寸法は桁行2.20m、梁行2.00m、主軸方位はN-10°-Wを示す。

柱穴は最低でも5本は欠落する。またP₂は伴うか否か不明である。P₂の帰属如何によっては内土間式(平地式)ではなく、一部束柱を伴う高床の建物構造を採る可能性もある。

柱穴形態は円形を基本としており、深さは一定しないが30cm~60cm前後のものが主体を占める。



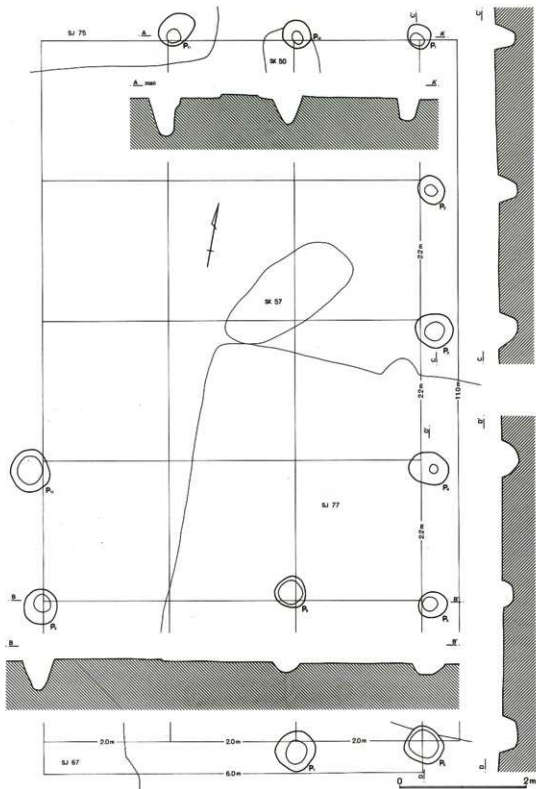
第242図 B区第12号掘立柱建物跡

覆土は黒褐色土を基調としているが、柱痕の有無は不明瞭である。

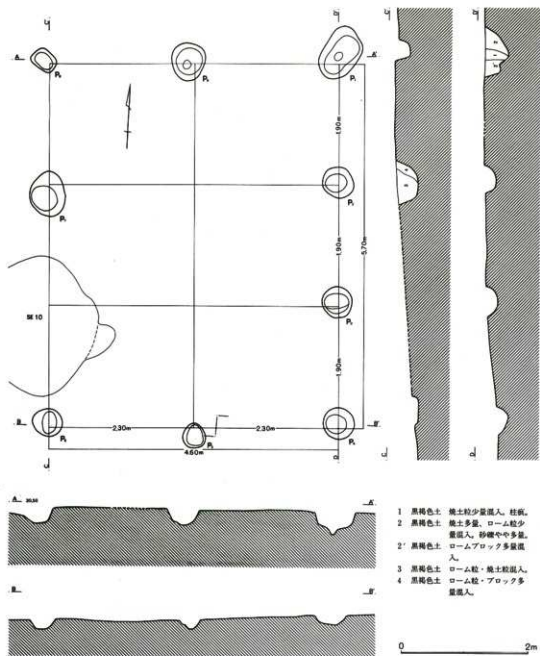
出土遺物はない。柱穴規模等から一応中世段階の建物と考えておきたい。

B区第14号掘立柱建物跡(第244図)

調査区中央部南端のF・G-8区に位置する。第12号掘立柱建物跡及び第10号井戸跡と重複するが、新旧関係は明確に捉えることはできなかった。3×2間の南北棟の建物で、規模は桁行5.70m、梁行4.60m、柱間寸法は桁行1.90m、梁行2.30mを測る。主軸方位はN-3°-Wを示す。



第243图 B区第13号掘立柱建物跡



第244図 B区第14号掘立柱建物跡

柱穴はP₁が大きい。他の柱穴はほぼ直径40～50cmほどの円形プランを基本としている。深さは15～40cmと全体に浅い傾向にある。覆土は黒褐色土を基調としており、P₁では柱痕が、P₇では柱を抜き取ったような痕跡が確認された。

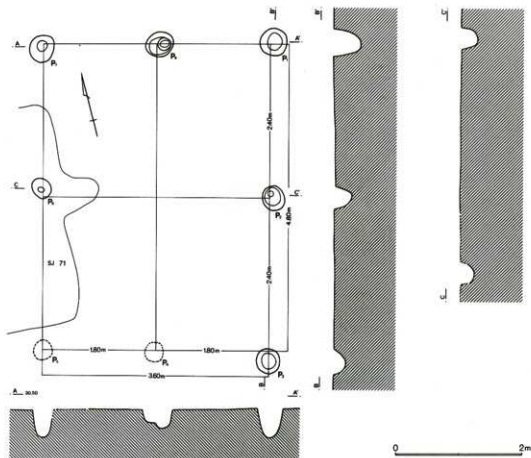
出土遺物はP₃覆土から土師質皿かと思われる小片が検出されたのみである(第246図2)。部厚なつくりで口縁部はヨコナデ、体部はナデか。小片であるため時期決定は難しいが一応中世と考えるべき。

B区第15号掘立柱建物跡(第245図)

調査区北東部のB・C-12区に位置し、第71号住居跡カマドの一部を切って構築されていた。不明な点はあるが、現状では2×2間の南北棟の掘立柱建物と考えられる。規模は桁行4.80m、梁行3.60m、柱間寸法はそれぞれ2.40m、1.80mとなる。主軸方位はN-13°-Eを示す。

柱穴は南側梁行の西隅柱と中間柱が検出されなかった。他の柱穴は円形プランを呈し、直径30~40cm程と小規模である。深さは20cm~50cmで、隅柱のP₁・P₂は比較的深い傾向にある。覆土の詳細は不明である。

遺物は検出されなかった。時期は不明であるが、柱穴形態から中世段階の建物と推定される。



第245図 B区第15号掘立柱建物跡

B区第12・14号掘立柱建物跡出土遺物(第246図)

1は土師器環で、口唇部に沈線が巡る。赤彩はない。口径17.3cmで、胎土に石英と白色粒子を含む。焼成は良好である。



第246図 B区第12・14号掘立柱建物跡出土遺物

色調は橙で、10%残存する。第12号掘立柱建物跡P₁出土。2は土師質皿か。推定口径11cmで、胎土に白色粒子を含む。焼成はにぶい橙で10%残存する。第14号掘立柱建物跡P₃出土。

(2) 井戸跡

B区第6号井戸跡(第247図)

E-7区に位置し、第38号住居跡と第47号土壌を切って掘り込まれていた。形態は不整形円形を呈し、規模は直径2.60m、深さ0.90mを測る。全体としては逆台形に掘り込まれるが、西側壁は中位に段が付く。覆土は4層に分かれ、第1・2層は暗褐色土、第3層は鉄分凝集層となる。その下層は青灰色粘質土で有機物を多量に混入していた。

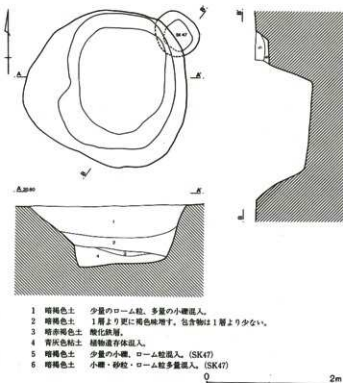
出土遺物は少ない。第248図1は灰陶器の耳皿と思われる。装の部分は遺存しない。内面に淡緑色の釉が掛かる。底部は糸切り離し後無調整で産地は不明。混入と考えられる。2は常滑系の鉢と思われる。高台部は剥落

している。内面は使用による磨滅が著しい。3は内耳鍋で底部は僅かに丸底風になる。4は在地系の片口鉢で内面は磨滅している。5は器種が不明確であるが一応脚付き盤とした。底部の中央に円形の小孔が穿たれ、底部外面には煤が付着している。脚部は図上では3脚に復元したが明らかではない。

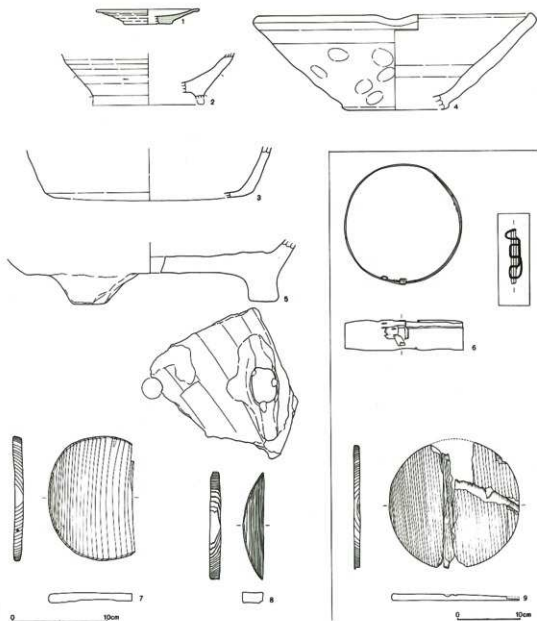
6～9は木製品である。6は曲物銅板で直径19cm、高さは4.7cm。重ね部分は棒皮で綴じられている。銅板下端には目釘孔が4か所穿たれていた。7は曲物の底板である。直径13.2cm、厚さ0.9cm。側面には目釘穴を差し込んだ孔が2か所認められた。8は円盤状の板材の一部。曲物底板とも思われるが、側面に目釘孔が存在しない。残存長は10.8cm、厚さ1.2cm。9も曲物の底板に類似する。直径21.0cm、厚さ0.9cm程である。側面には目釘穴は認められない。

B区第6号井戸跡出土遺物観察表(第248図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	産成色調	残存	出土位置・その他
1	小皿	(10.6)	1.6	(5.1)	A B	A 灰白	25%	覆土 底部糸切り 灰釉?
2	鉢		4.7		A B J	A 淡黄	10%	覆土 常滑系
3	内耳鍋		5.5	(22.0)	A I	B 黄灰	10%	覆土
4	片口鉢	(28.8)	9.9	(11.2)	A I J	C 褐灰	20%	覆土 内底面風化
5	脚付き盤		6.5	26.2	A I	B 灰黄	20%	覆土 在地系軟質陶器 器種不明



第247図 B区第6号井戸跡



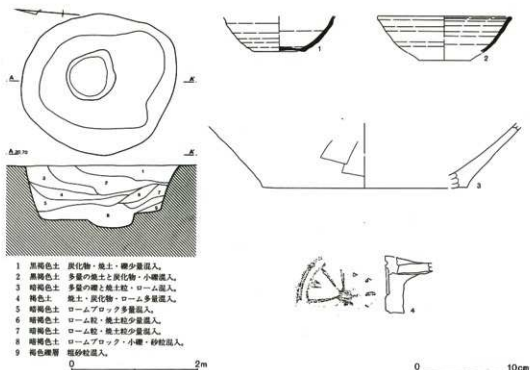
第248図 B区第6号井戸跡出土遺物

B区第7号井戸跡(第249図)

F-8区に位置する。中世の井戸跡が5基集中する中の1基である。形態は不整円形を呈し、規模は直径2.54m、深さは直径の割には浅く1.00mである。円筒状に掘り込まれ、底面は中心部が一段凹んでいた。

覆土は9層に分かれる。基底部は礫層に達しており、全体に礫とロームブロックが多く含まれていた。

出土遺物は須恵器坏(第249図1・2)、小形軒丸瓦(4)と常滑甕(3)がある。4の軒丸瓦は瓦当面



- 1 黒褐色土 炭化物・焼土・礫少量混入。
- 2 黒褐色土 多量の焼土と炭化物・小礫混入。
- 3 暗褐色土 多量の礫と焼土粒・ローム混入。
- 4 褐色土 焼土・炭化物・ローム少量混入。
- 5 暗褐色土 ロームブロック多量混入。
- 6 暗褐色土 ローム粒・焼土粒少量混入。
- 7 暗褐色土 ローム粒・焼土粒少量混入。
- 8 暗褐色土 ロームブロック・小礫・砂粒混入。
- 9 褐色礫層 粗砂粒混入。

第249図 B区第7号井戸跡・出土遺物

の一部と丸瓦部が残存する。瓦当文様は単弁4葉の退化形式かとも思われるものである。界線から三角形の間弁が垂下する。丸瓦との接合はいわゆる印籠接ぎ技法による。須恵器环と軒丸瓦は混入であろう。最も新しい3の常滑甕をもって一応中世と考えておきたい。

B区第7号井戸跡出土遺物観察表(第249図)

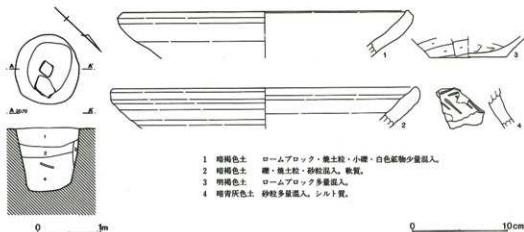
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	环		3.7	5.4	AC	C	灰白	25%	覆土 底部糸切り
2	环	(14.0)	3.8		AC	A	灰白	15%	覆土
3	甕		6.8	21.8	AB	A	灰	10%	覆土 外面へラナデ 底部砂底
4	軒丸瓦				ABC	A	緑灰		覆土

B区第8号井戸跡(第250図)

F-8区に位置する。形態は円形を呈し、規模は1.10m、深さ1.04mを測る。ほぼ円筒状に掘り込まれている。

覆土は4層に分かれる。第1・2層は暗褐色土で中位以下は暗青灰色のシルト質土が厚く堆積していた(第4層)。

出土遺物は少ない。瓦質の鉢(第250図1・2)、土師器壺(3)、瓶類(4)と、板碑の破片が2点ある。1・2は在地系と思われる。3は混入、4は頸部に櫛描列点文が巡り、胎土は精選されている。古代のものか中世のものかよくわからない。産地は東海系と推定される。板碑は第4層中から出土したが文字や種子は刻まれていなかった。図化は省略した。



- 1 暗褐色土 ロームブロック・焼土粒・小礫・白色鉱物少量混入。
 2 暗褐色土 礫・焼土粒・砂粒混入。軟質。
 3 暗褐色土 ロームブロック多量混入。
 4 暗青灰色土 砂粒多量混入。シルト質。

第250図 B区第8号井戸跡・出土遺物

B区第8号井戸跡出土遺物観察表(第250図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	鉢	(30.0)	4.9		A E	B	黄-灰	10%	覆土 瓦質の在地系鉢
2	鉢	(32.0)	4.2		A	A	灰白	5%	覆土 瓦質 ロクロ調整の鉢 在地系?
3	瓦?				B	A	灰白		一括 覆土
4	壺		2.2	(8.0)	A B C	B	橙	40%	覆土 混入と思われる

B区第9号井戸跡(第251図)

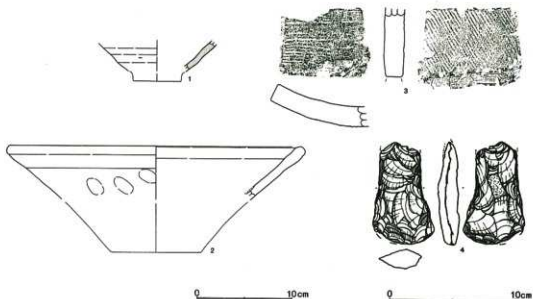
E-5区に位置し、第1号火葬墓と重複していた。新旧関係は本井戸跡の方が古いものと判断された。形態は不整形円形を呈し、規模は直径2.25m、深さは湧水が激しく底面まで掘り切れなかったため不明である。覆土上層はローム混じりの暗褐色土が堆積していた。

出土遺物は碗または鉢の胴部片(第252図1)、在地系の鉢(2)と平瓦(3)、縄文時代の打製石斧(4)がある。

第252図1は瀬戸美濃産の碗または鉢。胎土に白色粒子を含み焼成は良好である。色調は淡黄色で図示部分の15%が遺存する。覆土出土。2は在地系の鉢である。推定口径30.6cm、現存高5.6cm。胎土に石英と角閃石を含む。約10%が遺存する。覆土出土。3は平瓦で、凹面糸切り痕と布目(1cmあたり経糸7本、緯糸8本)を残す。凸面は叩きが施される。覆土出土。4は打製石斧で上端を僅かに欠く。残長7.8cm。3の平瓦と4の打製石斧は混入である。出土遺物から15世紀頃に位置付けられよう。



第251図 B区第9号井戸跡

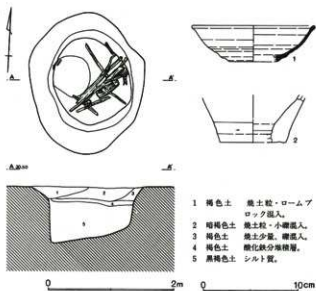


第252図 B区第9号井戸跡・出土遺物

B区第10号井戸跡(第253図)

調査区南端のF・G-8区に位置する。形態は楕円形を呈し、規模は長径2.20m、深さ0.90mを測る。上端部がラッパ状に開き、中段以下は不整形方を呈する。板材や棒状木製品が検出され、本来井戸枠が存在したものと推定される。

覆土は5層に分かれる。中層に酸化鉄分の凝集層が形成されている(第4層)。その下層は黒褐色～暗青灰色のシルト質土が厚く堆積していた。出土した常滑系の瓶から中世の井戸跡と考えられる。



- 1 褐色土 焼土粒・ロームブロック混入。
- 2 暗褐色土 焼土粒・小礫混入。
- 3 褐色土 焼土少量、礫混入。
- 4 褐色土 酸化鉄分凝集層。
- 5 黒褐色土 シルト質。

第253図 B区第10号井戸跡・出土遺物

出土遺物は須恵器環と常滑系の瓶がある。1は須恵器環で推定口径12.8cm、推定底径5.0cm。胎土に石英と白色針状物質を含み焼成は普通である。約20%残存する。覆土から出土。混入である。2は常滑系瓶の胴部下位の破片である。残存高は5.0cm、推定底径6.8cm。胴部下端は回転ヘラケズリ整形されている。また、外面は底部まで淡緑色の釉が掛かる。胎土に石英を含み、焼成は良好である。色調は灰白色で30%が残存する。覆土から出土した。

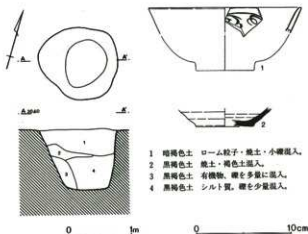
B区第11号井戸跡(第254図)

調査区南部のF-9区に位置する。形態は円形で、規模は直径1.28m、深さ0.95mを測る。底部はやや窄まり逆台形に掘り込まれている。

覆土は4層に分かれる。第3・4層は黒褐色のシルト質土が堆積し、有機物と礫が含まれていた。

出土遺物は須恵器環と青磁の碗がある。後者から中世の井戸跡と思われる。

第254図1は青磁碗の小片で推定口径16.0cm、素地土は灰白色でくすんだ緑灰色の釉が薄く掛かる。内面に草木文(?)が描かれる。竜泉窯系か。2は須恵器環で底径は6.0cm。胎土に白色針状物質を含み焼成はやや不良である。約30%が残存する。混入と考えられる。



第254図 B区第11号井戸跡・出土遺物

B区第12号井戸跡(第255図)

調査区南西部のF-2区、第5号方形周溝溝の方台部に位置する。第3号溝跡による区画の外側で、4号溝跡による区画の内部にあたる。形態は楕円形で、大きさは1.02m、深さ0.75mと小規模である。円筒状に掘り込まれ、一部はオーバーハングしていた。

覆土は4層に分かれる。第2層に大型の礫が多量に含まれ、その下部は砂質土で構成され、還元された有機質土は形成されていなかった。

出土遺物は常滑焼の大甕、在地系の壺、石臼と板碑がある。1と3は12号井戸跡から東へ35m程隔たった第6号溝跡から同一個体の破片が出土した。

第255図1は常滑焼きの大甕の口縁部片で、口唇部上端を僅かに欠いている。胎土に石英と白色粒子を含み焼成は良好である。色調は青みを帯びた灰色である。覆土出土。

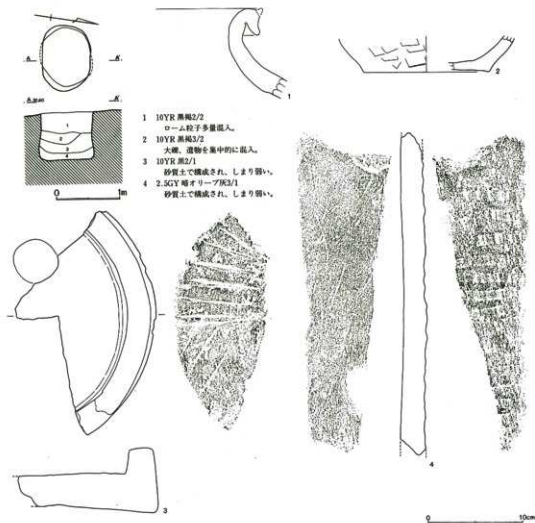
2は在地産の壺底部片と思われる。底径は13cmで、胎土に石英、白色粒子、角閃石を含む。色調は浅黄橙色で図示部の40%程が残存する。覆土出土。

3は石臼の上臼である。推定径28cm前後で、孔の痕跡が僅かに残る。

4の板碑は残存長33.6cm、残存幅11.0cm、厚さ2.6cmを測る。表面は無文、裏面は鑿による整形痕が残る。



B区第12号井戸跡周辺



- 1 10YR 黒褐2/2
ローム粒子多量混入。
- 2 10YR 黒褐3/2
大塊。遺物を集中的に混入。
- 3 10YR 黒2/1
砂質土で構成され、しまり弱い。
- 4 2.5GY 暗オリーブR3/1
砂質土で構成され、しまり弱い。

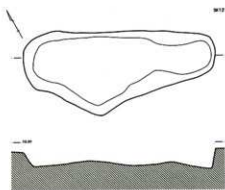
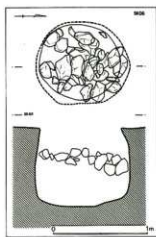
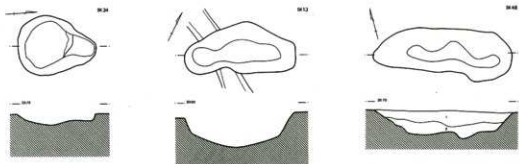
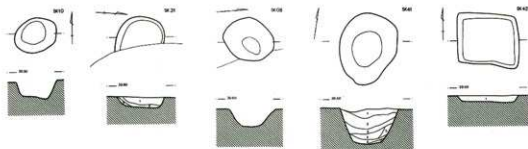
第255図 B区第12号井戸跡・出土遺物

(3) 土壌

中・近世と推定される土壌は11基検出された。ほとんどは中世段階のもので確実に近世に下がるものは見だせない。規模等の詳細は巻末の土壌一覧表に記載した。遺構は第256図、出土遺物は第257図に示した。ここでは、特徴的な遺構と遺物について概要を記すに留める。

B区第6号土壌(第256図)

F-5区に位置する。第29号住居跡内にあり、新旧関係は本土壌の方が新しいものと判断された。形態は円形で、規模は直径85cm、深さ80cmを測る。壁面がややオーバーハングし断面は袋状を呈する。いわゆる袋状土壌と同様な形態をしている。覆土中層には拳大から人頭大の礫が敷き詰められた様な状態で出土した。覆土の堆積状態は不明である。出土遺物は小形丸瓦の破片があるほか、在地系鉢の小片が出土した。出土遺物から中世段階の土壌と推定される。



- SK31
 1 暗褐色土 焼土粒・ローム粒・炭化物少量混入。
 2 黒褐色土 焼土粒・ローム粒多量混入。
 3 暗褐色土 ローム粒多量混入。
 SK42
 1 暗褐色土 大粒ロームブロック・黒褐色ブロック多量混入。
 SK48
 1 暗褐色土 ロームブロック少量混入。
 2 暗褐色土 ローム粒多量混入。

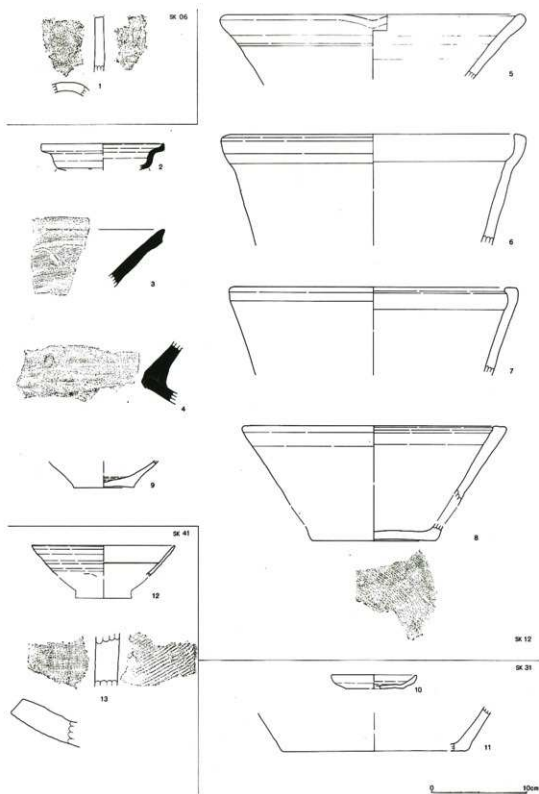
- SK41
 1 暗褐色土 焼土粒・炭化物多量混入。
 2 暗褐色土 多量のローム小ブロックと少量の少量の焼土粒混入。
 3 黒褐色土 ローム小ブロック多量混入。
 4 暗褐色土 黄褐色粘土ブロック多量混入。
 5 黄褐色土 粘土ブロック。
 6 暗青灰色土 粘質土。
 7 暗黒褐色土 粘質土。

0 2m

第256図 B区中・近世の土壌

B区中・近世の土壌出土遺物(第257図)

出土遺物は第12号土壌から比較的多く検出された。第257図8は在地系と思われる鉢で底部には糸切り痕が残る。10は第31号土壌から出土した土師質皿である。底部は非クロコ(手ずくね)成形と思われる。12は第41号土壌から出土した白磁碗で、口縁部内面には一条の鋭い沈線が巡る。



第257図 B区中・近世の土壘出土遺物

B区中・近世土壌出土土物観察表(第257図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	地色	調	残存	出土位置・その他
1	丸瓦				ABC	A	灰		S K06覆土
2	鉢?	(12.8)	2.8		ABC	A	灰白	20%	S K12覆土 器種不明
3	甕				ABC	A	オリノ灰		S K12覆土 口裂口縁片
4	甕				AB	A	灰		S K12覆土
5	片口鉢	(31.0)	6.7		AB I	B	灰	15%	S K12覆土 在地系 外面保付着
6	内耳鍋	29.4	9.2		AB I	B	灰黄褐	10%	S K12覆土 在地系 内面風化
7	内耳鍋	(30.0)	11.6		ABE	B	にふい	15%	S K12覆土 在地系
8	鉢	(26.0)	(12.0)	13.0	AB I	B	灰	40%	S K12覆土
9	坏		2.8	6.3	AB I	A	橙	35%	S K12覆土 底部調整不明瞭
10	皿	(8.9)	1.5	6.2	E	A	にふい	25%	S K31No4 覆土
11	甕		4.6	(19.2)	B	A	灰赤	15%	S K31No1 覆土
12	白磁碗	15.0	3.2		G	A	灰白	15%	S K41覆土
13	平瓦				ABC	A	明褐灰		S K41覆土

(4) 溝跡

B区では11条の溝跡が検出された。出土遺物や覆土から全て中世以降の溝跡と考えられる。溝跡の平面図は第258図～260図に、断面図は第261図に掲げた。

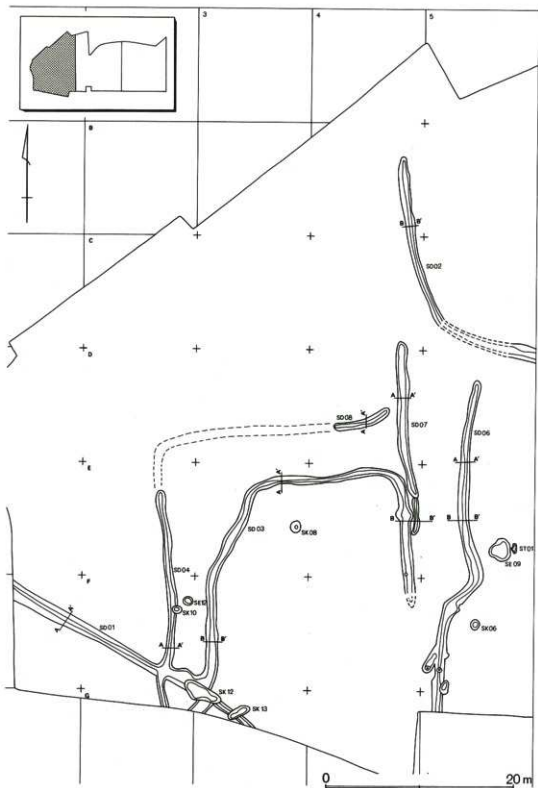
第1号溝跡は調査区南西部を南西から北東に向けて延びる。第12・13号土壌を切り、第3・4号土壌と交差する。新旧関係は不明確であるが、本溝跡の方が新しい可能性がある。規模は幅1m～1.4m、深さ40cm前後。覆土はローム粒子・礫を含む黒色土で構成され、最低2度の切り合い(掘り浅いか)が認められた。出土遺物は瀬戸平梳、鉢、在地産壺等が検出された。

第2号溝跡は調査区北西部に位置する。第1号方形周溝墓を取り囲むように、「コ」の字形に屈曲していた。幅は65～120cm程、深さは30～80cmと場所によってかなり数値は異なる。断面形態も一定しない。覆土は6層に分かれる。第1層～3層は灰褐色土、第4層は暗青灰色のシルト質土で、有機物を含む。第5・6層はロームを多量に含む褐色土で、掘り方なのか古い段階の埋土なのか特定できない。出土遺物は鉄軸灯明皿、瓦質の軒平瓦、平瓦が検出された。近世の区画溝であろう。

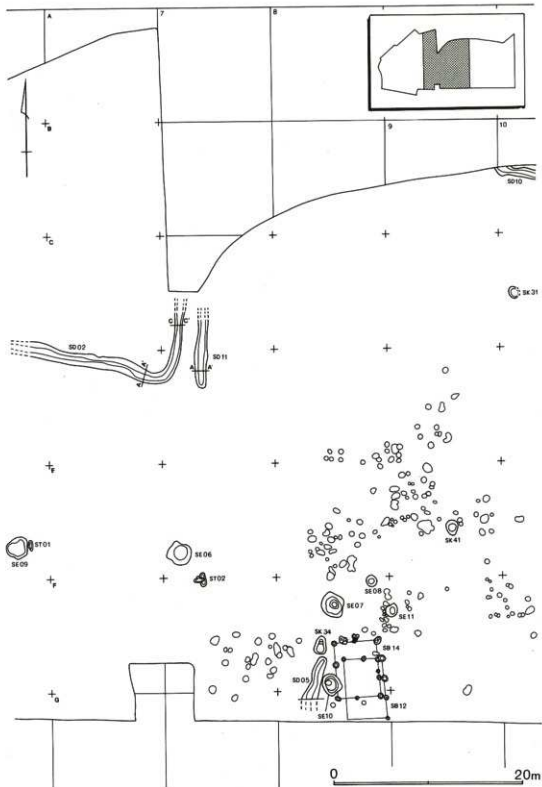
第3・4・6～8号溝跡は調査区南西部にあり、相互に有機的な関連をもつ溝跡と思われる。第3号溝跡は南に向かって「コ」の字状に開いている。溝幅は60cm～120cmで深さは20～40cmと全体に浅い。北辺と東辺は比較的直線的であるが、西辺はかなり蛇行していた。

第4号溝跡は第3号溝跡の西側約3m程隔たって、南北に延びる。第5号方形周溝墓北溝上で確認できなくなるが、3号溝に規制されているものとなると、東に屈曲し第8号溝跡に繋がる可能性がある。8号溝の東端と7号溝は約1m程間隔があり陸橋部とも考えられる。第7号溝は南北に20m延びている。南端は3号溝東辺を避けるように僅かに屈曲して終わり、直接切り合い関係はない。第6号溝は第7号溝の東側約6m程隔たって、ほぼ平行して南北に延びる。途中、第3号溝南端に平行する位置で屈曲して調査区外に消えていた。第3号溝の東西辺の間隔は約20m、第4号溝と第7号溝の間隔は25～26m、第4号溝と第6号溝のそれは28～31mを測る。

出土遺物は第3号溝と6号溝から検出されている(第262図)。第3号溝からは常滑焼の甕と内耳



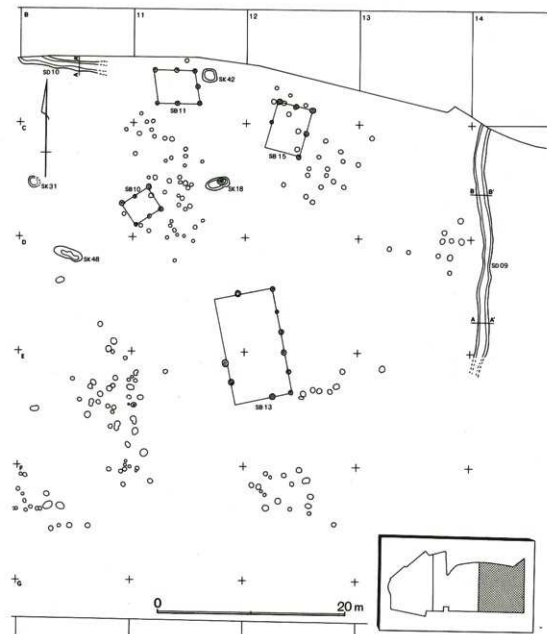
第258図 B区中・近世の溝跡(1)



第259図 日区中・近世の溝跡(2)

鍋、第6号溝からは青磁碗と内耳鍋、在地系の鉢、常滑焼の甕、石臼が出土した。常滑焼の甕と石臼は第12号井戸跡の破片と接合した(遺物は第12号井戸跡に掲載)。

性格としては中世の屋敷地を区画する溝と考えるのが妥当であろう。仮に第3号溝跡に囲まれる部分を内区、第4・8号溝と、7号或いは6号溝で区画される部分を外区とすると、両者が同時期に存在したかどうかは不明確で、第3号溝と7号溝の関係、また第13号井戸跡が第3号溝跡を切っていることからすれば、2時期、或いは3時期の変遷があるのかもしれない。内部には残念ながら建



第260図 B区中・近世の溝跡(3)

物は検出されなかったが、区画内に存在する3基の井戸跡はそれ自体、区画内が生活空間であったことを窺わせるものであるし、また第12号井戸跡と第6号溝跡の遺物が接合したことは両者がほぼ同時期に機能していたことの証左と見てよいであろう。

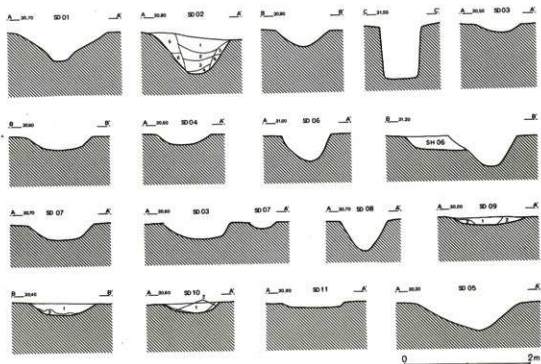
第5号溝跡は調査区中央部南端のF-8区に位置する。南に開く谷地に向かって北から南に約5m延びて消滅していた。覆土は黒色土で谷の埋土に近似する。出土遺物は須恵器環と常滑焼の甕胴部片が出土した。東側に近接する第10号井戸跡と何らかの関連をもつものかもしれない。

第9号溝跡は調査区東端のB-E-14区に位置する。ほぼ直線的に南北に貫流するがE-14区で消滅していた。幅は1.0~1.2m、深さは10~30cmを測る。覆土は灰褐色土(第1層)と黄褐色土(第2層)の2層に分かれ、何れも粘性が強い。性格は不明である。

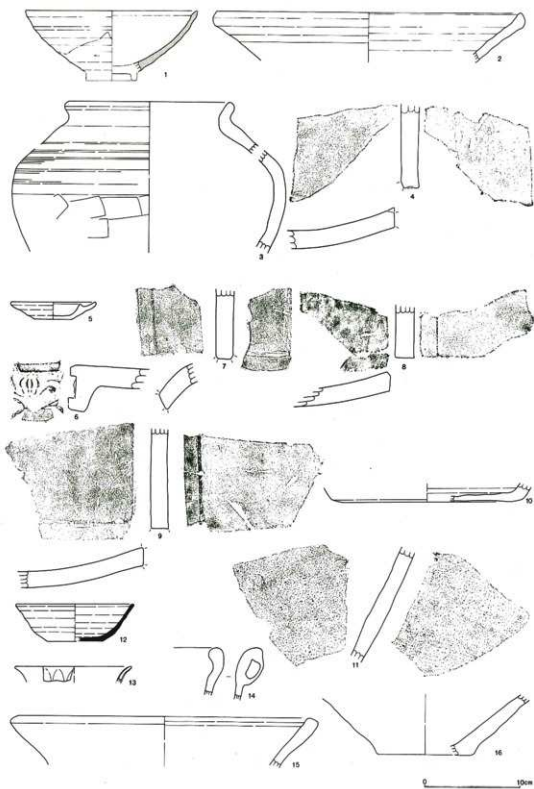
出土遺物は須恵器蓋・環、小形軒丸瓦、平瓦(第263図)と中世の在産鉢の胴部片が検出された。時期的には不明確であるが一応中世段階の溝跡と考えておきたい。

第10号溝跡は調査区中央部北端のB-10区に位置し、第47号住居跡を切って掘込まれていた。西端は調査区外に続き、東端は8m程東に延びて消滅していた。溝幅は90cm前後、深さは15~20cmを測る。覆土は褐色土(第1層)と黄褐色土(第2層)の2層に分かれ、後者にロームの混入量が多い。出土遺物はなく、正確な時期は不明であるが一応、中世とを考えておきたい。

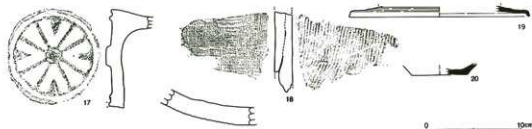
第11号溝跡はC-D-7区にあり、第2号溝跡の東側2mにほぼ平行して北に延びる。溝幅は90cm前後、深さは5cmほどと極めて浅い。性格は不明であるが第2号溝跡と関連するものかもしれない。出土遺物はない。



第261図 B区中・近世の溝跡土層図



第262図 日区中・近世の溝跡出土遺物(1)



第263図 B区中・近世の溝跡出土遺物(2)

B区中・近世の溝跡出土遺物観察表(第262・263図)

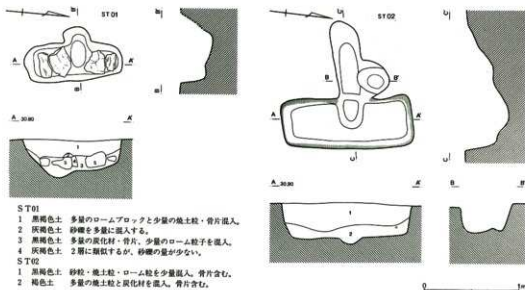
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	平碗	(18.0)	6.4		A	A	灰白	20%	S D 01覆土 瀬戸・美濃系 灰釉
2	鉢	(32.0)	5.2		A E I	A	灰白	10%	S D 01覆土 内面風化
3	甕	(17.0)	15.7		A B	B	灰白	20%	S D 01覆土
4	平瓦				A B E	A	灰		S D 01覆土
5	灯明皿	(8.8)	1.8	3.8	A	A	淡黄橙	45%	S D 02覆土 瀬戸鉄釉灯明皿
6	軒平瓦				A C	A	灰白		S D 02覆土 均整唐草文か
7	丸瓦				A B C	A	灰白		S D 02覆土 凸面光沢あり
8	平瓦				A B C	A	灰白		S D 02覆土 瓦質
9	平瓦				A B C	A	灰白		S D 02覆土 瓦質
10	内耳鍋		1.9	(20.2)	A I	A	灰黄褐	15%	S D 03No5 覆土 外面ナテ?
11	常滑甕				A B J	A	暗赤褐		S D 03覆土 胴部片
12	坏	(12.3)	3.9	(5.8)	A B C	A	灰白	15%	S D 03覆土
13	青磁碗	(12.0)	1.7		A	A	灰白	5%	S D 06覆土 竜泉窯系
14	内耳鍋				A B E I	C	黄灰		S D 06覆土
15	鉢	(30.4)	5.2		A B E	C	にじみ	10%	S D 06覆土 全体的に風化 在地系
16	鉢		6.3	(10.0)	A I	B	灰白	15%	S D 06覆土 内面磨減著しい
17	軒丸瓦				A B C	A	灰白		S D 09覆土 瓦当径10.1cm
18	平瓦				A B C	B	灰黄		S D 09No11 覆土(D-14-m)
19	蓋	(18.8)	1.1		A B C	A	灰	15%	S D 09No2 覆土(D-14-m)
20	坏		1.1		A B C	A	淡黄	15%	S D 09No7 覆土(D-14-i)

(5) 火葬墓

B区第1号火葬墓(第264図)

調査区西域のE-5区に位置し、中世の第9号井戸跡と重複する。新旧関係は本井戸跡の方が新しいものと判明した。形態は長方形の土壇の西辺中央に張り出しをもつものである。規模は長軸1.04m、短軸0.40m、深さ0.40mを測る。張り出し部の長さは約20cm程である。底面は一定せず南壁部が深い。

覆土は4層に分かれる。第3層には大型の礫が4個並べられた状態で残され、多量の骨片と炭化材、やや少量の焼土が混在していた。骨片は小破片となってランダムに混入しており、遺体の埋納状態や、人骨の本来の部位が特定できるような状況は観察されなかった。4個の礫は遺体の置台に使用されたものと推定される。出土遺物は緑釉陶器の椀が1点検出された(第265図1)が、混入であ



第264図 B区第1・2号火葬墓

ろう。

第265図1は緑釉陶器の碗の胴部破片で、残存高は6.3cm。体部外面には一条の沈線が巡る。淡緑色の釉が全面に掛かるが、剥落部分もみられる。素地土は灰白色を呈し軟質である。図示部分の約15%が遺存する。東濃産と推定される。覆土から出土した。

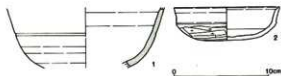
B区第2号火葬墓(第264図)

E・F-7区に位置する。北西側に中世の第6号井戸跡が近接して掘り込まれている。平面形態は長方形土壌の西辺に張り出しをもつ「T」の字形を呈する。張り出し部の北壁側瘤状に突出するピットは伴わないものと考えられる。

本体の土壌(焼成部)の規模は長軸1.38m、短軸0.52m、深さ0.45mを測る。底面は平坦であるが、張り出し部下の部分はピット状に一段深く掘り込まれていた。側壁はほぼ垂直に立ち上がる。張り出し部は段をもって斜め上方に上がり壁外に80cmほど延びている。

覆土は2層に分かれ、何れにも粉状になった骨片が含まれていた。第2層に炭化物の混入量が多い。また、焼成部である長方形土壌の壁面は、特に上半が強く被熱し赤変していたが、張り出し部には被熱した様子は認められなかった。出土遺物は土師器環が1点ある(第265図2)が、ピットから出土したもので直接伴うものとはいえない。

第265図2は土師器環で口径11.1cm、器高3.0cm。胎土に石英、白色粒子と白色針状物質を含み焼成は良好である。色調はよい橙色でほぼ完存する。口縁部外面と内面は赤彩が施され、磨減度がほとんど認められない良品である。口縁内面に沈線をもつ模倣環系の比企型環である。



第265図 B区第1・2号火葬墓出土遺物

5 時期不明の遺構

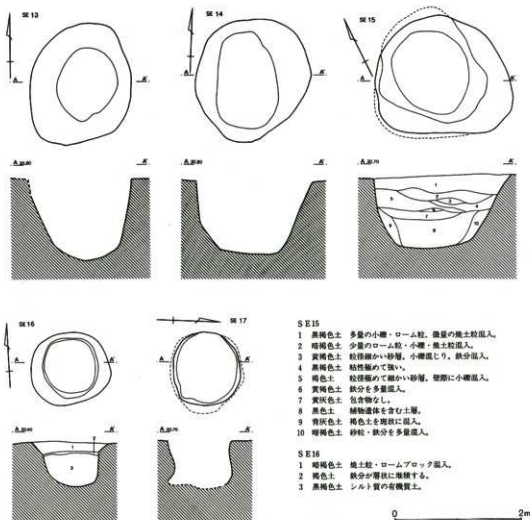
(1) 井戸跡

B区第13号井戸跡(第266図)

E-4区に位置する。第6号方形周溝墓方台部にあり、第3号溝跡と重複する。新旧関係は本井戸跡の方が新しい。形態は楕円形を呈し、規模は長径2.00m、深さ1.20mで底面は播鉢状に掘り込まれていた。出土遺物がなく時期決定できないが、第3号溝跡よりも新しい。中世の可能性もあるものとする。

B区第14号井戸跡(第266図)

E-4区に位置し、第13号井戸跡の西側に隣接する。第6号方形周溝墓西溝を切って掘り込まれて



第266図 B区第13～17号井戸跡

いた。形態は楕円形を呈し、規模は長径1.95m、深さ1.20mを測る。覆土は黒褐色の粘質土を主体として上層にはロームが多量に含まれていた。下層はシルト質の有機質土で、粘性が強い。

出土遺物は桃の種子が10数個検出されたのみで土器は出土しなかった。時期は不明であるが、おそらく中世段階と考える。

B区第15号井戸跡(第266図)

D-7区に位置し、第5号井戸跡の南側に隣接して掘り込まれていた。形態は不整形で、規模は長径2.20m、深さ1.10mを測る。底面はやや窄まり、逆台形に掘り込まれていた。覆土は10層に分かれる。第6層は鉄分の凝集層、第8・9層は黒褐色から青灰色の粘質土が堆積していた。出土遺物はなく、時期は不明である。

B区第16号井戸跡(第266図)

調査区南端のF・G-8区に位置し、第12・14号掘立柱建物跡の内部にある。新旧関係は不明である。形態は円形を呈し、規模は直径1.25m、深さは0.70mとやや浅い。覆土は3層に分かれ、第2層は鉄分凝集層、第3層は黒褐色のシルト質土で有機物を含んでいた。出土遺物はなく、時期は不明である。

B区第17号井戸跡(第266図)

E-6区に位置し、第34号住居跡を切って掘り込まれていた。形態は円形で、規模は直径1.16mを測る。湧水が激しく底面までは完掘できなかった。出土遺物はなく、正確な時期は特定できないが、中世段階の可能性があると考える。

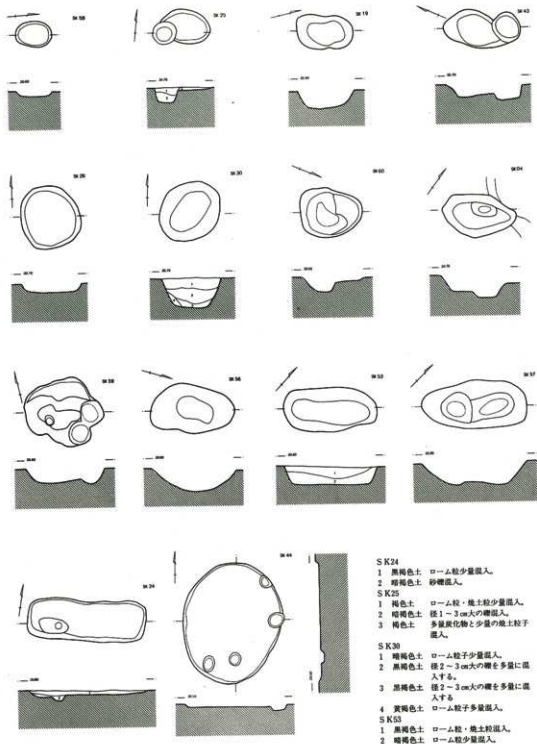
(2) 土壌

B区から検出された土壌のうち、14基については時期が特定できなかった。遺跡の継続期間から考えて、古代から中世段階のものが大半を占めるものと推定しているが、出土遺物がなくやむなく不明扱いとした。

遺構図は第267図に、規模等の詳細は巻末の土壌一覧表に掲げた。

(3) 土壌群

D-2～4区を中心に掘り込まれていた土壌群である(全測図参照)。略号はSX01である。重複する第2・3・5・7号方形周溝墓、第10号住居跡の全てを切っていた。また、第8号溝跡も切っているものと推定される。底面はクレーター状に掘り込まれ、凹凸が激しい。覆土はローム混じりの褐色土を基調としており、粘土採掘痕の様に個々の土壌が激しく重複していた。時期は不明であるが少なくとも中世後期以降である。おそらく近世または近代以降の土取り等の擾乱と推定される。図化は省略した。



第267図 B区時期不明の土坑

6 グリッド・表採遺物

ここではグリッド及び表面採集された遺物と、古墳時代以降の遺構から出土した縄文土器と弥生土器をまとめて掲載する。

(1) 縄文土器

第268図1は加曾利EⅠ式の深鉢。頸部文様帯の下端と、胴部文様帯の懸垂文の隆帯が確認できる。地文はRL。隆帯の脇になぞり状の沈線が認められる。

2～5は加曾利EⅢ式古段階の深鉢形土器胴部破片である。地文はいずれも複節のRLR。2は頸部文様帯の下端から、3～5は胴部の懸垂文のみ遺存している。懸垂文を構成する沈線は太く、浅い。

6～8は同一個体と思われ、堀之内Ⅰ式前半の深鉢形土器。口縁部に肥厚帯を有し、これに文様帯を有する。口唇部内面にわずかに段を有し、口唇端部は尖り気味になる。頸部は緩やかに括れている。7では口縁部に未貫通の孔が3個確認できる。これを中心に対向するように弧線が描かれるものが、いくつかの単位を持って施文され、それをつなぐように棒状の沈線が描かれる。胴部には直線的な懸垂文が、無文地の上に描かれる。

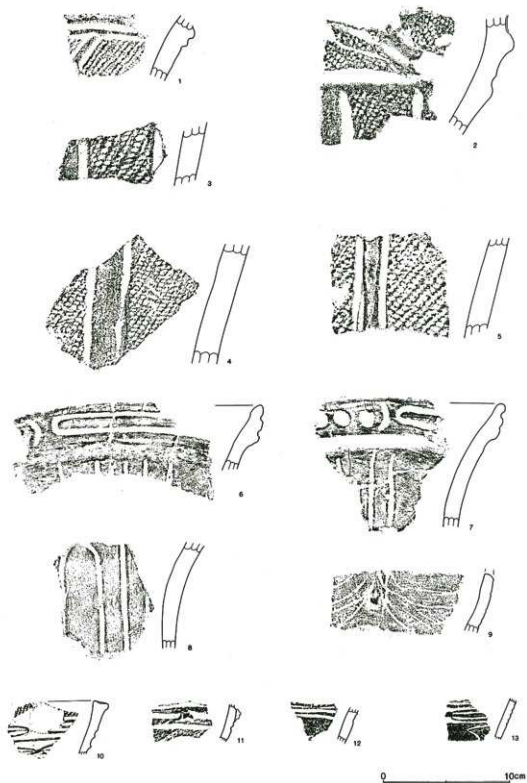
9は安行3c式波状口縁深鉢の口縁部破片。波頂部は欠損している。波状は緩やかで、平縁に近い。波頂部下にやや縦長のボタン状突起が貼付され、口縁に沿って数条の弧線が施文される。弧線間には棒状工具の先端による刺突が認められる。

10～13は晩期終末浮線文期の甕、または鉢形土器。10は甕で、口縁部文様帯に2段以上の浮線文が彫刻的な手法で施されている。浮線文の結節部はわずかに肥厚する。口唇部直下にはLR縄文が施文され、突起の頂部はわずかにくぼんでいる。浮線文の手法と構図から、浮線文期後半のものと考えられる。11はおそらく甕形土器の胴部文様帯の下端の部分。沈線の結節部が瘤状に盛り上がる。地文に燃承文が施文されている。前半か後半かは不明。12は鉢の胴部破片と思われる。無文地の上に平行沈線が3本施文される。13は破片上端に平行沈線と浮線文が描かれ、その下に、沈線で曲線的な構図が描かれている。浮線文手法はあまり発達せず、無文地の上に平行沈線を引き、工具でえぐることによって、結節部を作り出している。結節部は殆ど肥厚していない。曲線的な沈線文は破片の下端と右端に沈線の一部が遺存しており、流水状を呈すると考えられる。(村田章人)

(2) 弥生土器

第269図1は播磨文系の甕である。頸部に幅広の櫛歯状工具(4本組)により簾状文を横位に巡らし、その下位にへら状工具による沈線を縦方向→斜方向に施文する。胎土に石英、白色針状物質を含み在地産と考えられる。焼成は普通でよい橙色を呈する。中期後半に比定される。第58号住居跡から出土した。

2は細頸壺の頸部片である。頸部にLRの単節縄文を横位に施文後、篋描沈線を2条巡らす。胎土に石英と白色粒子を含む。焼成は普通で橙色を呈する。中期後半に比定される。第6号住居跡か



第268图 B区出土绳文土器



第289図 B区出土弥生土器

ら出土した。

3は細頸壺の頸部である。羽状縄文を3段横位に施文しその間をへら描沈線で区画している。胎土に石英、白色針状物質を含む。焼成は普通で、にぶい橙色を呈する。中期後半、宮ノ台式であろう。第42号住居跡から出土した。

4は壺肩部の破片である。無区画の単節縄文(LR)を横位に施文するが、全体に風化が激しく遺存状態は悪い。胎土に石英、白色針状物質を含む。焼成はやや不良で、色調はにぶい橙色を呈する。

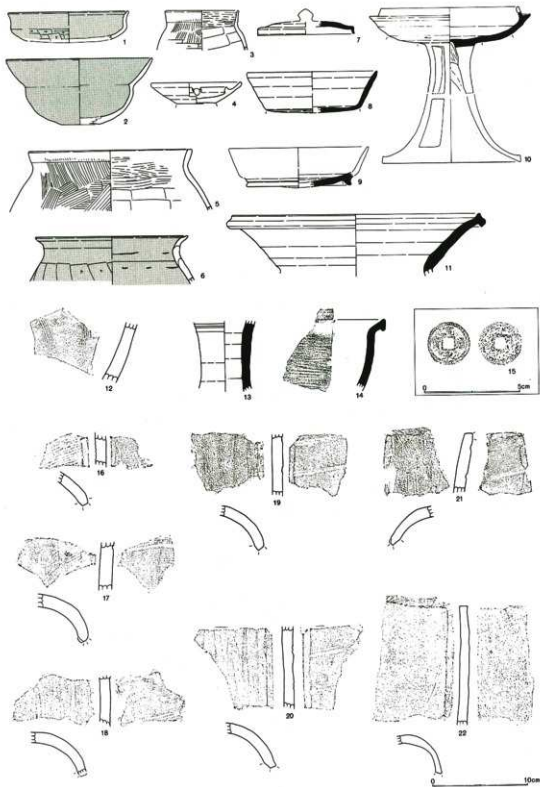
(3) グリッド出土遺物

第270・271図にはB区のグリッドから出土した主な遺物を掲載した。

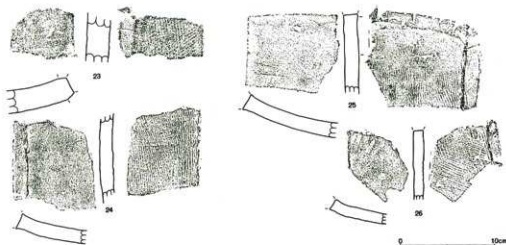
第270図2は有段口縁の鉢。出土位置から第2・5・7号方形周溝基のいずれかに帰属するものであろう。9は東海産と思われる高台台である。底部破片で傾きに不安を残すがいわゆる「出尻底」になる可能性がある。10は長脚2段の有蓋高環である。口唇部と脚部が欠いている。脚部は3方透かしである。12は瀬戸美濃系と思われる播鉢。15は寛永通宝である。16～22は小形の丸瓦、23～26は平瓦である。23は通常の大きさの平瓦、24～26は小形の丸瓦とセットになる小形平瓦である。

B区グリッド出土遺物観察表(第270・271図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	環	(12.5)	2.9		ABC	A	にぶい橙	15%	D-4-a区 赤彩
2	鉢	(15.2)	6.9	(3.9)	ACEJ	B	にぶい橙	20%	D-3区 赤彩
3	小形壺	(7.6)	4.2		ABC	A	浅黄	20%	D-9-k区
4	灯明皿	(9.4)	2.2	4.1	G	A	灰白	50%	D-6-a区
5	甕	(17.0)	6.4		AE	A	にぶい橙	15%	D-9-k区
6	蓋	(16.0)	5.1		ABC	A	にぶい橙	30%	D-4-e区 赤彩
7	壺	(10.1)	1.4		ABC	A	灰	25%	D-9-l区 天井部クロコナテ
8	環	(13.7)	4.3	(10.0)	ABC	A	灰白	15%	D-9-l区 底部全面回転ヘラケズリ
9	高台環		1.4	(10.8)	AJ	A	灰白	30%	F-10-a区
10	高環		6.8		ABC	D	灰白	50%	D-4-a区 長脚3方透し高環
11	甕	(26.0)	6.5		ABC	A	赤灰	15%	D-3-d区
12	播鉢				ABJ	A	にぶい橙		E-9-a区
13	長頸瓶		7.3		ABC	A	灰白	95%	G-9区 沈線2条巡る
14	鉢				ABC	A	灰白		D-2-k区
16	丸瓦				ABC	A	淡黄		D-10区
17	丸瓦				ABC	A	浅黄橙		C-11区
18	丸瓦				ABC	A	灰白		C-11-a区
19	丸瓦				ABC	A	灰白		C-11-a区
20	丸瓦				ABC	A	灰白		C-11-g区



第270図 日区グリッド出土遺物(1)



第271図 B区グリッド出土遺物(2)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
21	丸瓦				ABC	A	灰白		C-11-a区
22	丸瓦				ABC	A	灰		C-11区
23	平瓦				AJ	D	橙		C-6-a区
24	平瓦				ABC	A	灰白		C-11-a区
25	平瓦				ABC	A	淡黄		C-11区
26	隅切瓦				ABC	A	灰白		C-11区

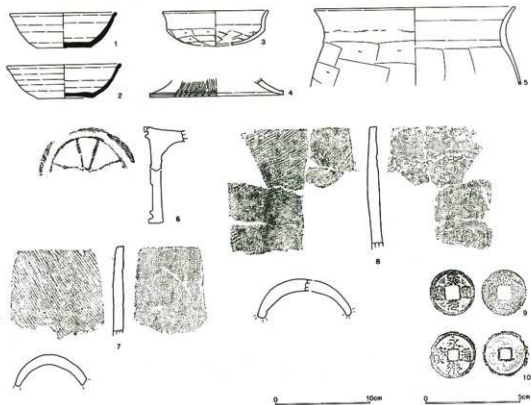
(4) 表採遺物

表採遺物は第272図に掲げた。

第272図1・2は須恵器環。4は小形高坏脚部か。端面に櫛歯状工具による列点文が刻まれている。非在地産の可能性ある。6は小形の軒丸瓦である。瓦当面の1/2弱が残存する。弁は凸線で表現されている。同様な文様意匠をもつ軒丸瓦はB区から他に3点出土したが、本例には間弁と思われる三角形の文様が欠落している点に特徴がある。7・8は小形丸瓦である。9・10は古銭。2枚錆着した状態で出土。9は北宋銭の熙寧元寶(1068年初鑄)、10は明銭で永樂通寶(1408年初鑄)である。

B区表採出土遺物観察表(第272図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	環	(11.1)	3.7	5.7	ABC	A	緑灰	20%	底部回転糸切り
2	環	(11.8)	3.5	5.7	ABC	A	灰	40%	底部回転糸切り
3	環	(11.0)	3.6		ABCE	A	浅黄橙	30%	無彩 内面へラナデ
4	高坏		1.8	(14.0)	B	A	浅黄橙	10%	小形高坏
5	甕	21.0	8.2		ABEJ	B	浅黄橙	25%	
6	軒丸瓦				ABC	A	灰白		小形軒丸瓦
7	丸瓦				ABC	B	灰白		
8	丸瓦				ABC	B	淡黄		



第272図 B区表採遺物



B区から入西条里を臨む

第1表 福荷前遺跡B区 遺構新旧対照表

新番号	旧番号	新番号	旧番号	新番号	旧番号	新番号	旧番号
SJ-01	SJ-76	SJ-34	SJ-28	SJ-67	SJ-70	SB-11	SB-
02	47	35	27	68	61	12	
03	51	36	26	69	60	13	
04	52	37	85	70	40	14	04
05	54	38	84	71	34	15	
06	02	39	33	72	53	SE-01	SE-04
07	03	40	31	73	50	02	15
08	04	41	32	74	48	03	
09	05	42	30	75	41	04	
10	10	43	37	76	49	05	
11	13	44	36	77	42	06	07
12	06	45	65	78	71	07	09
13	07A	46	82	79	87	08	10
14	07B	47	83	80	73	09	01
15	08	48	35	81	74	10	12
16	09	49	66	82	15	11	13
17	11	50	39	83	56	12	SK09
18	12	51	88	84	82	13	02
19	12	52	38	85	57	14	03
20	14	53	69	86	55A	15	08
21	29	54	78A	87	55B	16	14
22	81	55	78B	88	67	17	
23	17	56	77	89		SD-01	SD-01
24	16	57	80	SB-01	SB-06	02	02
25	18	58	75	02		03	03
26	19	59	68	03	07	04	04
27	01	60	79	04	08	05	13
28	25	61	86	05	09	06	06
29	20	62	43	06	03	07	07
30	21	63	44	07		08	08
31	24	64	45	08	05	09	09
32	22	65	58	09		10	10
33	23	66	59	10		11	12

第2表 B区土墳一覽表(1)

番号	旧番号	位 置	規 模 (長軸×短軸×深さ)	時期	出 土 遺 物	重複関係等
1	1	G-2	170×170×25	古代	須惠环	
2	2	D-1	84×74×23	古代	須惠环	S J 07内
3	3	D-1	86×78×27	古代	須惠环	S J 07内
4	4	E-5	156×90×50	不明		
5	5	C-6	346×130×28	古代	土師环	
6	6	F-5	84×80×84	中世	丸瓦	S J 29内
7	7	E-3	224×116×41	古代	須惠甕	S R 05内
8	8	E-3	108×90×39	中世		S R 05内
9	1	E-5	70×52×5	古代	須惠高台环	
10	10	F-2	86×72×35	中世	在地系鉢	S R 05内
11	11	F-2	94×82×12	古代	土師甕	
12	12	F・G-2・3	406×174×42	中世	在地系鉢・内耳鍋他	
13	13	G-3	232×106×74	中世		
14	14	E-11	74×71×20	古代		S J 65内
15	15	C-3・4	214×94×98	古代	須惠蓋	S R 02内
16	16	B-13	126×92×28	古代	平瓦	
17	17	B-13	154×90×12	古代		
18	18	C-11	223×100×40	中世		S J 03内
19		F-7	118×64×38	不明		
20	20	D-8	146×122×22	五領	土師甕	
21	1	F-12	104×100×26	古代	須惠环	
22	1	F-13	92×68×27	古代	須惠环	
23	23	F-10	214×112×24	古代		
24	24	E-8	246×80×21	不明		
25	25	E-8	122×70×32	不明		
26	26	C-11	134×124×10	不明		
27		D-14	188×90×32	古代		S J 86・87内
28	28	D-9	114×106×57	古代	土師环他 須惠环・高台环・蓋	
29	29	D-9	268×102×43	古代	土師环・甕 須惠环	
30	30	F-8	140×122×72	不明		
31	31	C-10	100×60×23	中世	土師質皿 帶滑甕	
32	32	F-8	102×98×40	古代		
33	33	E-8	112×76×42	古代	須惠环・甕 灰精桶 丸瓦 紡錘車	
34	31	F-8	164×124×20	中世		
35	35	F-7	114×90×29	古代	須惠环 灰精桶	
37	37	F-7	102×90×12	古代		
38	38	F-7	96×94×13	古代		
39	60	C-11	130×104×36	不明		S J 04内
40	61	B-11	258×102×9	古代	丸瓦 平瓦	
41	41	E-9	150×122×75	中世	白磁 平瓦	
42	62	B-11	128×106×12	中世		
43		F-7・8	130×74×23	不明		
44	64	C-11	252×214×9	不明		
45	66	E-9	106×84×14	古代		S J 46内
46	46	E-7	176×82×59	古代		S J 38内

番号	旧番号	位 置	規 模 (長軸×短軸×深さ)	時期	出 土 遺 物	重複関係等
47	47	E-7	74×68×25	古代		
48	48	D-10	292×104×55	中世		
49	69	D-12	68×40×31	古代	須恵環・甕	
50	50	D-12	180×92×47	古代	土師甕	
51	51	D-12	172×74×37	古代	土師環・甕	
52	52	D-12	74×58×15	古代	須恵甕	
53	53	C・D-13	200×94×50	不明	土師環 須恵鉄鉢形 刀子	
54	54	D-11	276×160×45	古代	土師壺・高環	S J 75内
55	55	E-12	246×206×46	五領		
56	70	D・E-12	178×104×49	不明		
57	57	D-12	222×102×49	不明		
58	58	C-11	76×54×12	不明		
59		E-9	163×133×37	不明		
60		D-10	218×116×35	不明		S J 53内
61		F-10	246×192×44	古代	土師環・皿・甕 須恵環他	旧 S X 01

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第145集

稲荷前遺跡(B・C区)

住宅・都市整備公団坂戸入西地区土地区画整理事業関係

埋蔵文化財発掘調査報告

—Ⅷ—

(第1分冊)

平成6年10月20日 印刷

平成6年10月31日 発行

発行 財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

〒369-01 大里郡大里村大字箕輪字船木884

TEL (0493) 39-3955

印刷

巧和工芸印刷株式会社